明治三十年六月二十四日發行

女鑑

第百三拾六號

東京國光社

女鑑第百三拾五號

目録

鈴木阿辰



女子と話柄と

女子が家庭につくすの外、心神を慰籍するに足るものを求めむとせば、まづ之を書籍に求むべきなり。知識をひろめ、身の教となるなど、書物の益は、今更之を說くまでもなし。讀書は、實にまた多くの話柄を與ふるものなり。話柄を多く有すべきことは、今日の女子の急務の一にあらずや。

時候の挨拶、芝居のうはさなどの外に、今の中等社會以上の女子は、いくばくの話柄をか有する。婦人の相話するを聞くに、親しければ、親しき程、うの言聞くに堪へざるもの多し。舅、姑の惡口は言はずとするも、隣家のうはさ、隣家の細君の惡口、召し使ひの下女の失策、食物の料理、漬物の漬具合など、一聞人をして嘔吐を催さしむるもの多きにあらずや。かゝる所以のものは、畢竟知識乏しく

して、話柄なきによるなり。如何に美服盛粧するも、其の言ふ所にして、野卑ならば、之を貴婦人とは云ふ能はざるなり。ゆかしき話柄を多く有するに從ひて貴婦人の資格益加はるを見る。

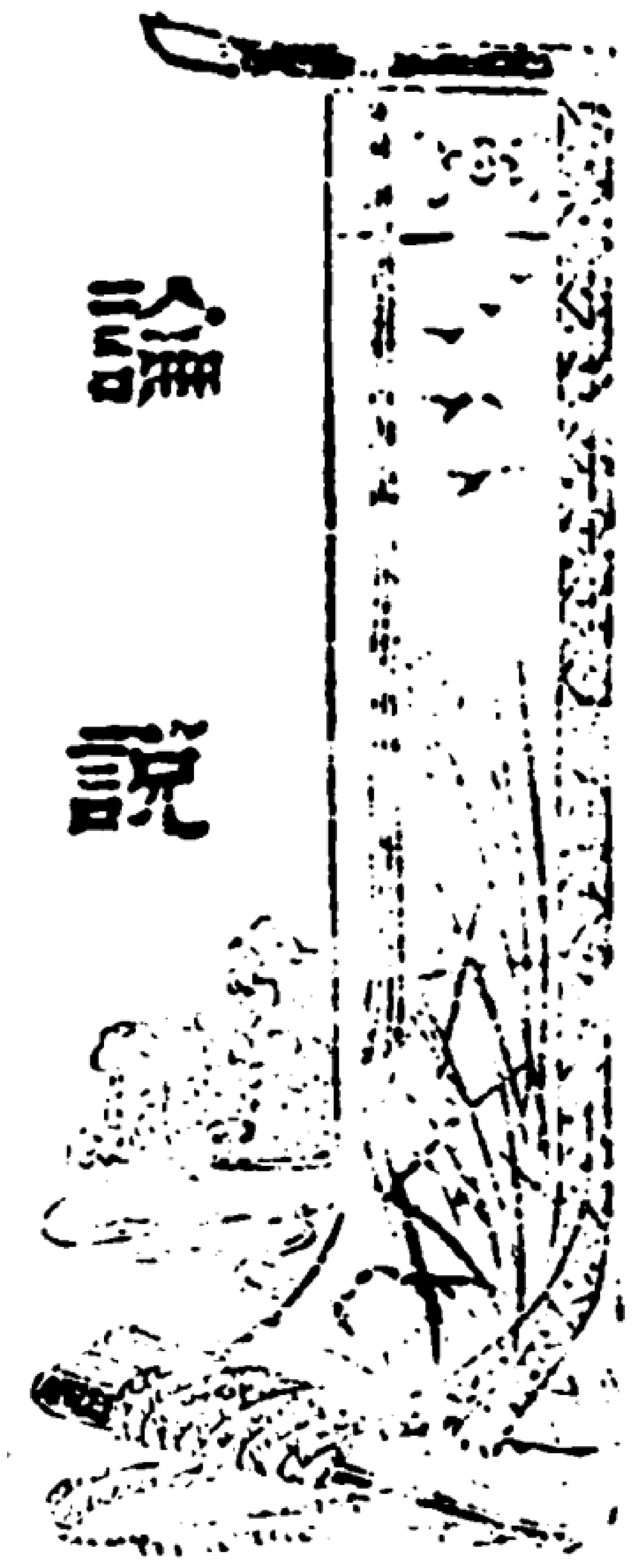
今の中等社會以上の婦人は、歷史の趣味を有せず、地理(山川風色)の趣味を有せず、文學の趣味を有せず、美術の趣味を有せず、國家に關し、社會に關しては、殆んど痛痒相關せざるもの〻如く、教育ある男子に對して、其の心を滿足せしむるに足るの話柄は、絶えて之を有せざるもの多し。これ貴婦人の資格の一を欠ぐるものに非ずや。かく云へばとて、吾人は、婦子に博聞を衒へ、饒舌となれと説くものに非ず、談話は交際に必用なり。貴婦人の談話は、殊に高尚純潔なるを要す、默すべくして默し、語るべくして語るは、これ人に對するの務なり。饒舌家は、大に貴婦人の品格を墮せども、唯々默々として、すまし過ぎて、毫も口を開かざるは、これ人に對して、敬禮を欠ぐものなり、交際の法を知らざるものなり。方今の貴女は、默々を以て、品位をたもつ秘訣と心得る人多けれども、其はいみ

じき僻事ぞかし
啻に交際上のみならず、日常家庭に於て、殊に話柄を選ばざるべからず。舅、姑は、年老いたるものなれば、何事も古を好むものなり。されば、家婦たるものもひと通りは、維新前の事を解し、之が話相手となるの資格なかるべからず、而して、談話の受け身となるに止まらずして、我よりむかしの話を試むるに至らば、嫁、姑の間いかばかり樂しかるべきぞや。また中等社會以上の男子は、みな敎育あるものなれば、下女の惡口、澤庵漬のよしあしなで、糟臭き話しは、決して聞いて快しとするものに非ず、家の婦たるものは、之が話敵たるに相應しき話柄を有せざるべからず、殊に子女を敎へ育つるにつけて、母たるものは、尤も話柄に富まざるべからず、小供は、好奇心に富みて、お話しを最も好むものなればなり且つ今の小兒は、小學校に於て、一般の學問を修め、歴史、地理、理化、博物、天文、數學などを解せるものなれば、母たるもの、あまり無學無識にして、隨ひて其の話柄も下らぬ事のみならば、はては、小兒等は、其の無學を笑ひ、之を侮

るに至るべし。かくては、まことの母となりて、其の子を教育すべくもあらず。女子たるものは、學者たるを要せず、饒舌家たるを望まず、唯ひと通りの知識を備へて、高尚にして趣味多き話柄を多く有することを務むべし。かゝれば、出でゝ人に交はりて、貴女の品位をたもちて、交際いとゞ圓滑なるべく、入りて家を治めては、姑嫁親しみ、夫婦和し、母子敬愛の度を加へて、融々たる春風常に家庭の外に溢るべきなり。

されど、人は偏し易し。女子たる者は、ゆめ讀書子となること莫れ。今日女子の讀書力あるものは、自ら高ぶり、人を見下し、たちぬひ、臺所の事などをつとむるを屑とせず、終日、書物と相對し、もしくは筆を弄して、子泣くも顧みず、爲に家政みだれ、一家の經濟とゝのはざるもの多し。かくの如きは、讀書の餘弊なり。吾人の尤も厭ふ所なり。吾人が讀書をすゝむる所以の本志にあらざるなり。人やゝもすれば云ふ、子をそだて、家を治むる家婦の身にとりては、讀書するの遑なしと。されど、心かけひとつにて、遑は出來るものなり、生來讀書を好むも

のならば、家を治むるの餘、ゆたかに讀書するの閑日月あるものなり。語を寄す、唯、讀書に慰籍と話柄とを求めよ、讀書の爲に身を誤ることなくんば可なり。



論説

女子敎育に就きて（承前）

齋木文夫

國家の隆替存亡、人心の强弱剛柔は、女子敎育に關係すること多し。故に吾人は、敢て女子大學を無用と論定せず。否な、之を必要とする時期なきにはあらざるべし。然れども、高等女學校といひ、女子師範學校といひ、女子の中等敎育すら、閒寂として霜枯の景色に似たるあるに、不順序にも、大學を設立せんとするに至りては、空中に樓閣を築かんとするが如し、アデンの花園を妄信する者に在りては、這般の空想は免れ難きか。呵々。

翻ふに、一旦、勃發せし女子敎育熱が、俄然沈衰するに至りしは、歐化主義の弊害、

自由結婚となり、女尊男卑となり、無君無父の宗教信者となり、風紀紊亂名狀すべからざりし者ありたるが爲なり。論者は、「雖然」を以て臭名を轟かしたる能勢某を知らざるか。又師弟の自由結婚を以て、四面の攻擊に堪へざりし谷田部某を知らざるか。今や、女子教育は、戰後經營問題と共に、世の注意する所となり、春風駘蕩の氣運に向はんとするは、陰に吾人の喜悅する所なりしに、之を利用する歐化主義が、若し再び害毒を流すに至らんには、女子教育は無用なり、弊害多しとは、理由ある斷定となりて、女子教育の萎縮を來し、教育は男子のみに限るべきに至らん。吾人の、夙夜輾々、杞憂する所爰に在り、然るに、表には女子教育を尊重して、陰には、女子を洋教の材料に使用せんとする者あり、惴々焉、恐れざるべけんや。

所謂、女子大學設立趣意書には、巧に其爪を隱したれど、明に耶蘇信徒なりとの感想を起さしむべき者は、「天の使命」といへる用語にあり。然れども、論者が女子教育に對する精神は、耶蘇教主義なりと論定するを憚らざるなり。

論者は女子大學に對する教育の、主義方針として說明せる者を、女子教育振起策に於ては、女子教育の區別順序として說明し二者の間抵觸を生せしは、左の三者なり。

「第一、女子を人間として教育すること」

「第二、日本婦人として教育すること」

「第三、女子を日本國民として教育すること」

右三者が、若も、女子教育の區別順序ならば、教育の主義方針と云へるは誤りなり。若、又、女子教育の主義方針ならば、女子教育の區別順序と云へるは誤りなり。論者は、文書に表示する者だけに、甘く形蹟を闇まして、巧に籠絡を逞くせんとするも、蔽ふべからざるは口なり。口によりて論者の眞意は、發露せり。「口は禍の門」なり、論者も鏡山のやしほたるを免れず。

若も右の三者を教育の順序として見るときは、第一次の教育は世界主義たらざるを得ず。されど「人間として」と云へり、世界の人間を養成するは、佛教も、耶蘇教も異なる所あらず、其中に就きて、論者は耶蘇教を撰取せんとする者なり、然らずんば、女子教育に於て、宗教教育の必要なるを主張し得ざる筈なり。

假りに一歩を讓りて、教育の主義方針と見なすも、尚、疑團の生ずるを免れず。我が國未だ曾て女子を、機械として教育したることあらず、其時代に適合する賢妻良母たらしめん爲に教育せしなり。然るに無用にも、「人間として教育」するとは何ぞや。然れども、此條件は、論者に取ては有用欠くべからざる者ならん、若も此個條なくんば、

宗教々育はなす能はず。世界主義は注入する能はず。論者の如き耶蘇信徒に於いはて實に必要欠ぐべからさる者ならむ。

耶蘇の教義たるや、路可傳に「我誠告爾、夫爲神之國、離屋宇、或父母、或兄弟、或妻子、而今世不獲倍蓰、來世不獲永世者、未之有也」と云へるが如く、天國の爲には、我家をも、父母をも、兄弟妻子をも捨てざるべからずと云ふにあるを以て、人間としての教育は、耶蘇信徒に於ては最も必要なるべし。故に女子大學に幼稚園をも、小學校をも附屬せしめ論者が主張する通り、教育の順序として、人間たる教育を施し、世界主義者として、其思想の抜くべからざるに至り。即ち三ッ子の魂を確定せしめれきて後に、言譯一片に、日本婦人たる教育や、日本國民たる教育を施さんとする者なり。論者が單純に女子大學のみを設立せさる眞意も亦了解するを得べし。

論者が、眞正に國民主義の教育を實施せんとする意思なきことは、我か國の風俗習慣を打破せんとするに汲々たるにても明かなり。實に「ルーツー」が耶蘇教徒は、眞正の市民たる能はずと喝破せしが如し。之を以て論者は、歴史的關係を破壊する第一着手として、日本の婚姻法を變更せんと企て、「今日我が國に行れて居る馬鹿らしい婚禮と云ふ者は、實に私共は、常に認めて慨嘆して居る所でありますが、是も女子教育を高め

て、智育德育を進めて往つたら、自ら止むで仕舞ふだらうと思ひます」と高言して、何故に馬鹿らしきか、又婚禮を如何にすへきかを明言せず。

然れども、一方には、米國風を獨尊唯一に吹聴するより考察せば、彼は自由結婚論者たらん、自由結婚何が故に推重すべきか、今又觀察の方面を異にせば、彼は五十六十にして初婚せよと主張する者なり、此者果して、子孫を永續せしむるに足れる機能を有するか、何れにせよ、彼は青年男女の、尤も稱讃すべき自由結婚論者にあらずんば國民滅絕の希望者なり、我が國家は此亡國の論旨を容るゝ能はざるなり。

然るに、論者は、遺傳の尊重すべきことを嘖々す、奇怪と云ふも餘りあり、若も、誠意、遺傳を尊重せんには、歷史を侮蔑せる議論は生ぜざるべき者なり。又彼の言ふが如く、遺傳は敎育に由りて、變更するを得べき者と假定せば、「アメリカは婦人の權利の盛なる所で、…………女の粗暴なる所であるけれども、大學校に這入て學だ婦人の家庭に行けば、女らしくて惡いものを退けて仕舞ふた善い女がある」と云ひしは何ぞや。米國は女子敎育盛なりとするも、尙女子は粗暴にして、稀に善い女があるに止まれり。實に敎育の效果は、價値なき者となるべし。彼は此論難を避けんが爲に、「今日女子敎育に、弊害の多いと云ふことは、女子敎育其ものの罪でなくして、敎育家及敎

育法の罪である。且又今日女子教育の弊害、又は男子教育の欠點と云ふ者は、決して獨り教育當局者ばかりの罪でないのです、社會の罪が大に與て居ります」と云ふも教育に依りて謙遜辭讓、道德圓滿の人を造り得と云ひしと撞着するを免れず。故に又、女子高等教育を受けたる者の感化は、一町村のみに止まらず、一郡一國にも波及すと斷言せしは、架空の說たらんのみ、之を以て論者の主張に贊成の意を表せざるは、豈獨り吾人のみならんや。

文部省參事官寺田勇吉氏は、獨逸解剖學者ワルダイル氏が「女子の高等教育を修むるに適するや否は、男女躰質上の異同に關する者とす、女子の血液は、男子に比すれば性質輕量にして、水分に富み、且つ重要なる成分乏しきを以て、其腦髓機能も、從て男子に比すれば、重要なる精神上の事業を營むに適せざるを免れず。之れ全く人身有機躰の構造の如何に基く者なるを以て、凡そ十四歲頃、發情期の始めより、漸次其差違の增加する者にて、之を獸類に徵するも、牝牡の血液上、亦此差異を證明するを得べし」と云へるを援用して、女子高等教育を否定せしは、僅々數月の前なりき。吾人は敢て、獨逸婦人を我が國の女子と同一なりと主張する者にあらず。寺田氏が文部の參事官たる故に引用せるにあらず。ワ氏が獨逸學者なるが故に敬重するにあらず。

女子大學設立論者は、米國のみを主眼として他國の例を顧みざるが爲に、注意を促すのみ、深夜人定まりし後、滿腔の野心を退け、愛心忡々女子の前程を相像せば、豈、思半ばに過ぐることなからんや。吾人が辨を費やす者は、三思の勞を促さんが爲なり吾人、豈他意あらんや。

女子教育一斑（四十三）

三輪田眞佐子

第五態度　美は形躰にも相伴ふものなれど、女子の美育につきては、又この點にも注意すべきなり。凡そ、人の奇石を集め、老松を植ゑ、鳥獸さへ愛する所以のものは、多くその形躰の美を樂まんためならんか、若し、人類の嗜好かゝるものなりとせんには、勢ひ互に容貌の美醜を言ふ傾きあるは免れざる事實ならんかし。

さりながら、人に尊ふ所のものは、精神の美醜にありて、骨格なぞは問ふべからず。況して醜婦と生れしものは、いかにつとめんも、今更美人と化する能はざるより、世に棄てらるゝとせんか、あはれ人情は果なき限りにてこそ。されど、天は人の心を捨てざるためなれどにや、心に盛德存する婦女は、その形躰に比較して、幾くか上品に見ゆる容貌となるべし。おのれは骨格を指して形躰と稱し、品格を目して容貌と言ひて、

相區別せんとするなり。

その上品に見ゆる原因は、態度に美の備はれるなり。されど、女子たるものは、態度を修めざるべからず。古人言ひけらく、和氣あるものは必ず艶容あり。と、さて、女子は、内に靜淑端正威望、及び愛嬌の諸德具はりてこそ、始めてその風采外に美なるなれ。故に、をのれの所謂美なる風采の女子は、人々これを侮らざるに至り、以て老者を安んじ、少者をなづけ、將た長者には、なべて信せらるゝならん。

態度の美を養ふには、茶道を修むべし。そもそも茶道の淵原を考ふるに、支那の三國時代に於て、孫皓が韋昭を饗するとき、酒に代ふるに茶を以てし、唐末に及びて、陸羽が茶經を著はし、盧同が茶の詩を賦し、遂に騒人の雅尙となりしとかや。わが朝へは、鎌倉時代に彼より傳來し、珠光がその道を講し、利休居士に至りて大成せりとぞ。蓋し、居士は、草庵を結びてこれを味ひしかど、全く奢侈ならざる風流に過ぎざりしかど、その後、茶を鬪はすとて、茶器に巨萬の財を投け、貴重の歳月を費すことゝなりぬ。されど、をのれは、かゝる花奢の風を女子に傳へよとの意にあらずして、單にこれを以て態度を修め、美育の一端にもがなと望むのみ、すなはち、茶道を修めんには、をのづから器物の受授など、一般の擧作、所謂、美なるべし。なほ、これを優美の女

藝として學ぶもよし。凡そ事物は、その淵源にのみ拘泥すべからず、されど、茶道を以て美育に利用するも妨げなかるべし。かの勝山なる結髪は、吉原の娼妓勝山こそ濫觴なりけめと言ふも、今日は一般婦人の結ぶ髪風にはあらさるか、唯、時に應じて宜しきに從ふてこそ識者の任なれや。

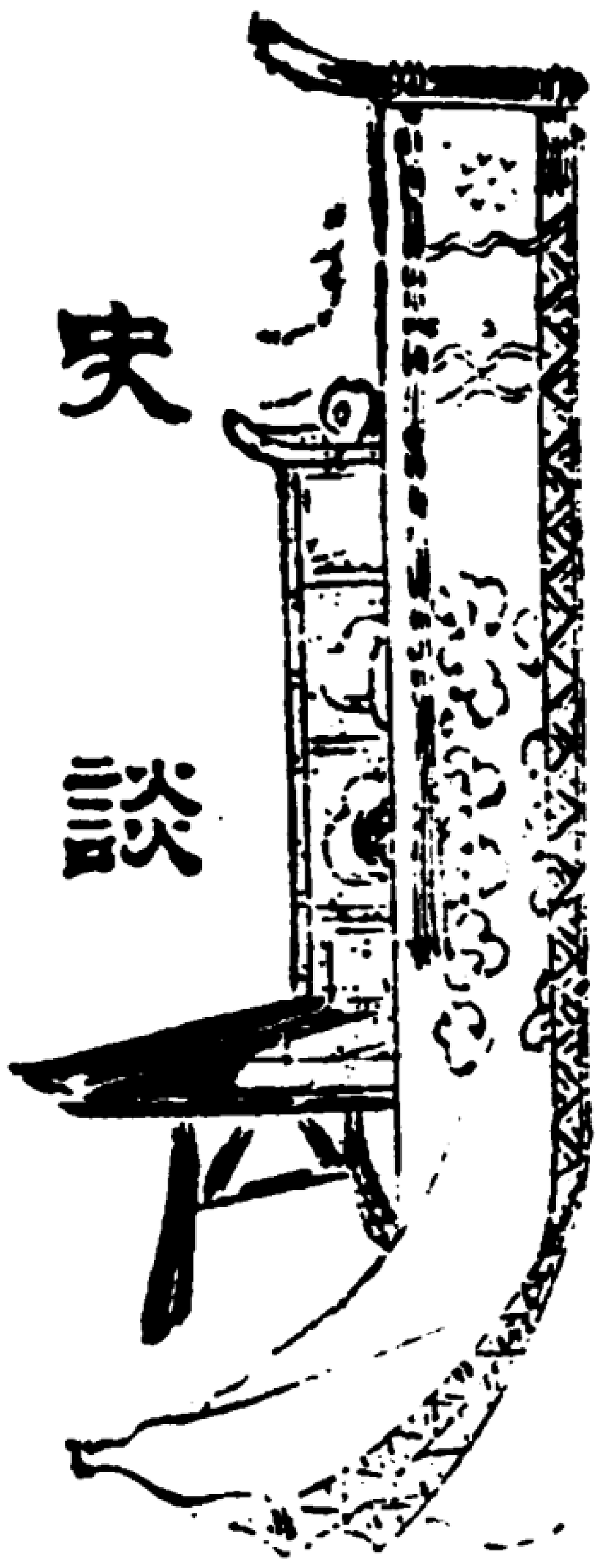
女禮は態度を修むるに最も必要なるものなれど、是非とも能くこれを演習して、坐作進退、わざとならずも禮節に適ひ、法式に當るやうつとむべし。

元來、女禮なるものは、一時代若くは一個人の規定せしものにあらずして、國民幾百年の積習、及び祖先の禮讓威儀と信せし動作に外ならざれど、苟も國家の存在せん限りは、日本固有の女禮あるべきなり。

そもそも女禮は、女子の事を行ふに當りて宜しきを得、且人に接するとき、心中の恭敬自然外に表るゝものなれど、つとめて虚禮を避くべし。從ひて、女性の天眞を守りて、卑屈に失せず、粗暴に流れざるやう心得べし。げに人の行は、天眞ばかり美なるはなし。なほ女禮につきては、拙著、女子の本分を參考し給ひね

體操は、女子の淑德を破るものと擯斥するものあれど、その操法の種類、校風の高下、及び教授の目的如何によりては、恐るべき結果あらんかも知るべからざれど、苟も適

當なる教練を加へんには、こは體育に必要なるのみかは、女子の姿勢を端麗ならしむるものとして、美育にも効能あるべし。故に、おのれは、女子の體操を以て淑德を破るものとならざるのみかは、更に美育の一端ともなることを望むなり。昔日の女子は、體操よりも活潑なる武術をぞ學びしかど、そがため貞順温厚の女德を傷けざりき。されど、今日女子體操の結果につきては、教育者らの責に任せざるべからず。
思ふに、態度の美醜は、專ら精神の美醜に影響せらるゝものなれど、精神の修養は、茶道、女禮、あるは體操よりも肝要なることな忘れぞ。



史談

鈴木阿辰

壚井ふく子

孝たらんと欲せば貞ならず　貞たらんと欲せば孝ならず、是非なくたゞ一死を以父と夫とに報いし可憐の女子こそあれ。鈴木阿辰やがてこれなり。

阿辰は仙臺藩の下士鈴木八五郎と云ふものヽ女なり。八五郎男の子なかりければ、やがて同じ邑なる八太夫と云ふものを納れて養子となし、家を嗣がしむる事となりぬ。阿辰、人となり至孝にして、父母にやさしう、またよく夫に貞なりければ夫妻、親子の間もむつまじう、女兒さへまうけて、家いとさかえたりしが、その女兒二つとなりける年、夫八太夫惡疾にかゝりけるに、阿辰はいたくうれひ、一すぢに介抱せんとするにひきかへて、父はいたく之を憎み、八太夫との緣をたちて、阿辰を他へ嫁せしめんとしけるが、阿辰は從はず、妾、誠に不肖、大人の御心をいためまつるは悲しけれど、一たび同穴をちかひし夫、今病出でければとて、下紐を結びかへんは、妾の忍びざる所、父君の仰せにはあれど、此義ばかりは許させ給へと泣きて辭み、母なる人さへともに八五郎を諫めて、其日はそのまゝに止まりぬ。されど八五郎は惡疾を惡む念しきりに止まらず、如何にもして女を奪ひて、他へ嫁せしめんと思ふものから、また、その志のいたづらに奪ふべからざるをさとり、遂に惡事をかまへて八太夫をれとしいれ、女の志を奪はんとし、ある夜竊に隣室に入り、米粟を奪ひ、餘粒を八太夫の牀の下にまきれき、吾、今盜人を得たり、あるまじき我が養子哉とて、隣人に告げ、阿辰にも語りて、その所爲を罰しひんとすれども、惡疾こそは出でたれ、惡念を起さんとする

夫にあらじと、阿辰は深く信じたれど、これ必ず誣事ならんとて、少しも意に介せずますます謹みて、親と夫にかしづくに、父之にも心奪ふ事能はず、かゝる上はかまへて、法に伏さしめて、女を奪はんものと思ひ巧み、八太夫の罪惡數件を設けて、法ならぬ法に訴へけるに、官、之を鞫問したれども、もとより巧みし事なれど證とすべきものも暗きに、官、阿辰を召して、之を明かならしめんとしぬ。

阿辰は、かねて、父が夫を誣ひて、官に訴へしとき、大に悲しみ、思ふよう、妾、父に從ひて、夫を刑戮に陷らしめむ不貞なり、さりとて、また夫に從ひて、父の隱慝を擧ぐるも不孝なり、夫のぬれぎぬもはさまはしう、父の巧みもれはふはまはしう、心一つをしぼりつくせど、二道遂に全ふするを得ず、今は、たゞ一死より外、身を處する道はあらじと思ひ、東西しらぬ幼兒を背に負ひて、近き河のほとりに行きて、たゞ世を水の心にまかせてんものとすれど、流石にれつる涙と共に人目もしけく、とかくあやしみ問はれなどするに、　かくては此の水の底もたのみ難しと思ひかへし、また何げなく家に歸り、今夜自刄せんものと思ひ、それとなう家人とわかれの盃さゝんとてか、酒を買はしめんとて家の奴を市に出したる折りから、官より召逮の命至りたるに、阿辰さわがず之を向へて、妾もとより往かまほしう思ひ居る折りからなり。した

らく待たせ玉へとて、室にひき入りしに、吏は何の心もなく、外に立ちて居りしに、むらくするも出でず、なほ今や〳〵と待つ事久しうすれども、なほ出で來らず。吏あやしみつゝ、內を窺ひ見しに、むざんや、阿辰は、罪なき幼子もろともに刄に伏し、あけにそみて仆れたり。吏おどろきて內に入り、死躰を起したれど、あはれむへし、阿辰親子は、はやことたえて、此の世の人にはあらざりけり。

官吏惻然として、歸りて事のよしを聞えしかば、官、きびしく兩人をとりしらべしに遂に八五郎の巧あらはれ、阿辰の死情も察せられしに、藩侯、いたく、その志をあはれみ、父の死罪一等を減じて、永く獄に繋ぎ、其の母には一人ぶちを賜ひて、身を終へしめ、夫八太夫に命じて、家事を理めしめ、さて、阿辰の死躰を坂本村の天性寺に葬らしめ、金若干を賜ひて、あつく葬事をいとなましめ、鈴木氏の遺地數頃を付して之が墓田となさしめたり。儒臣田邊希元ために碑を建て、節婦の墓と名づけ、永倉進平なるものをして之を書せしめたり。事、實に、正徳甲午の年、四月十四日にあり。時に阿辰二十七歲、花の香りもまだ失せはてぬ新樹の盛りを、むなしく無情あらしに散らしけるぞ、いとをしきや。

安兵衛の妻　　三矢重松

出羽の國庄内の城下に、安兵衛とて、廩米二十五俵とれる奉公人あり。年若くして病死しけれど、親族集りて評議す。男子安之助は七歳、妻は二十五歳なれど、後夫をむかへて跡相續せしめむといへども妻從はず。親族、又、幼少の安之助に家督を願ひては、成人までは給米も大に減ずべし。世のする所皆々の例なれど、曲げて一同の議に任せらるべしといへども、妻更に聞き入れざれど、やむことを得ず安之助に相續を願ひけるに、二十五俵の内十俵下されけり。さて安兵衛が母、年老いたる上に病つきて、身體自由ならざれど、この妻晝夜側を去らず、看病誠に深切なり。かゝりし程に、家次第に貧しくなりて、飯事足らず。この妻女の手仕事などにて、辛くもその日を送るも、姑には更にその色をも見せず。よろず姑の望をかなふ。一年、姑、八九里ばかりある溫海といふところに湯治せんことを願ひけれど、安きことゝて姑にかくし、わが貯へ置きし衣類を賣り、その價をもて之を辨せり。或る時、灣臺院といふ寺に、唱禅といふ僧の説法ありと聞き、姑聽聞を望みけるに、歩行かなはぬことなれど、こゝかしこ走りまはりて人を雇ひけれども、折節その人なかりければ、せん方なく、妻みづから姑を負ひてかの寺に日毎に通ひけり。その至孝公に聞え、寛保二年、安之助いまだ幼少

なれども本高二十五俵下され、姑への孝養をあつく賞せられけりとなん



家政

折形

有住齊

全解

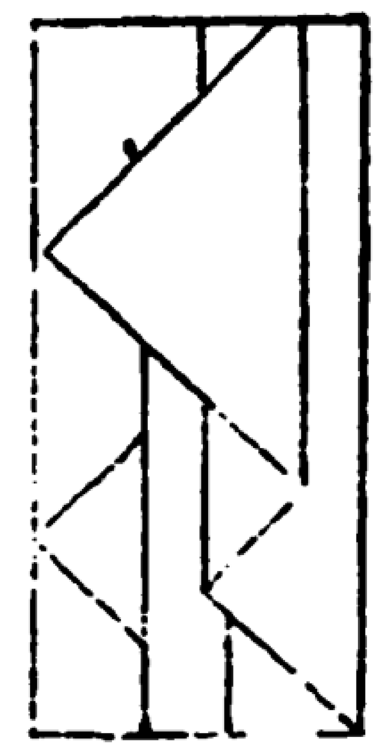
書付、水引わりし下包あることもあり。



笄、小刀、茶扮包

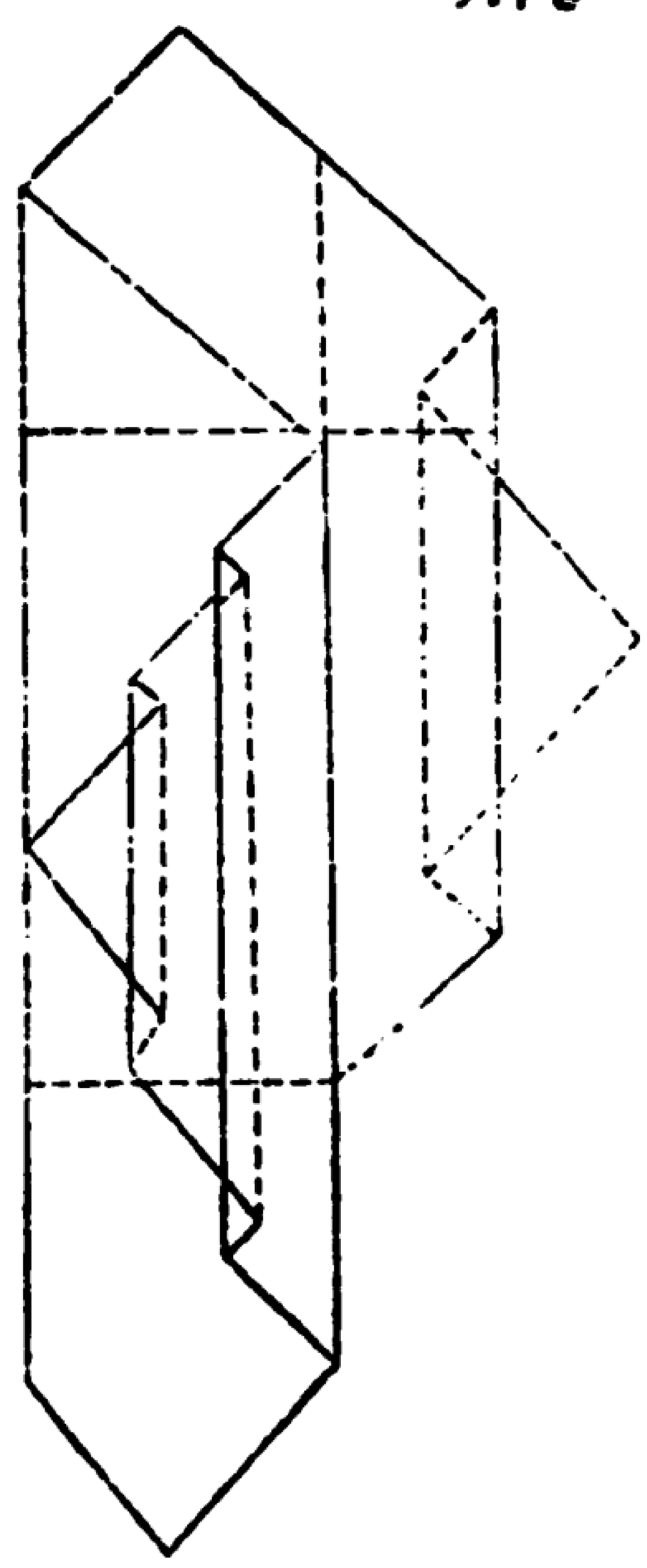


括緒、紐類包

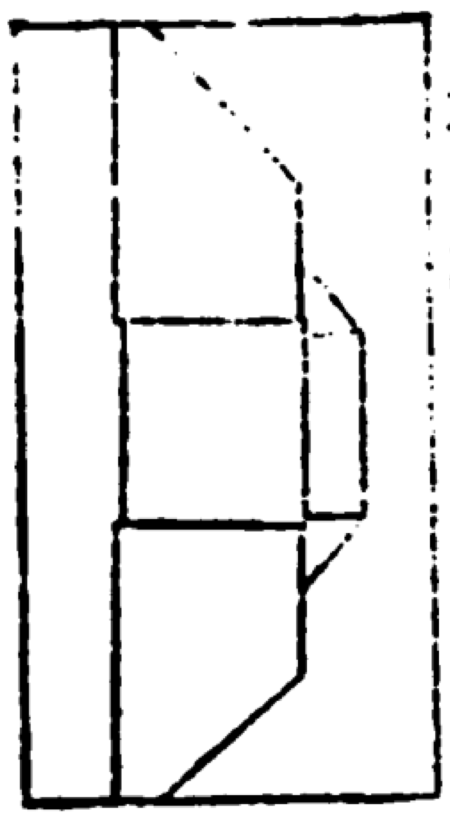


書付も、下包もなし。巾着の結、其外何にても水引かける。

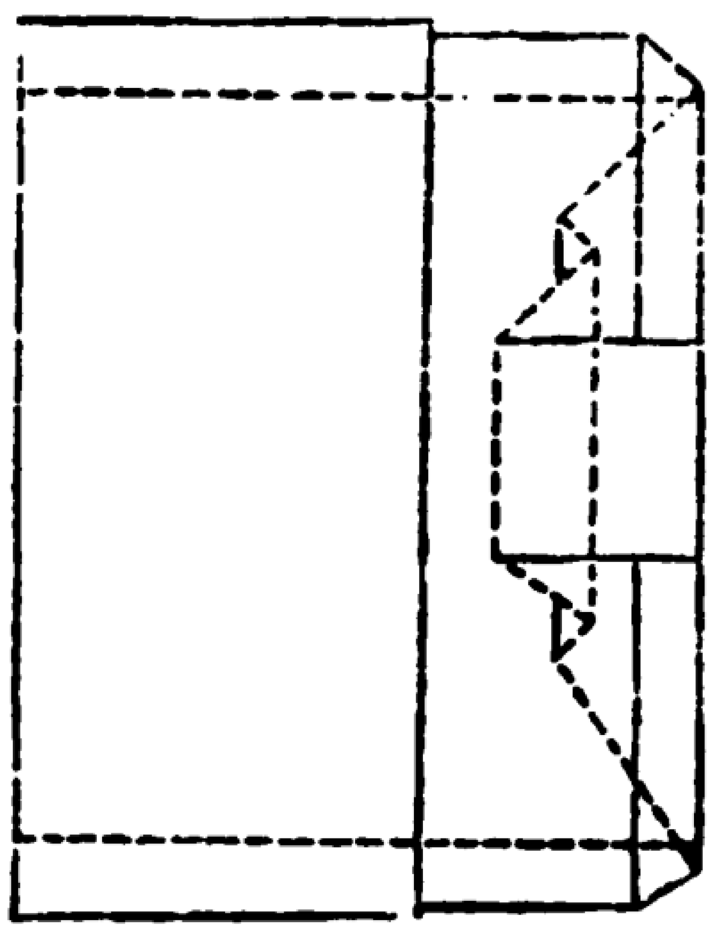
全解



唐革織物切類包



全解



下包なし。書付あり、品により上下を折らぬもあり。水引かくる

正誤

前號三井家婚禮式の條下介添淺田千賀子とありしは麻田千賀子の誤り。

たちぬひ

西山たい子

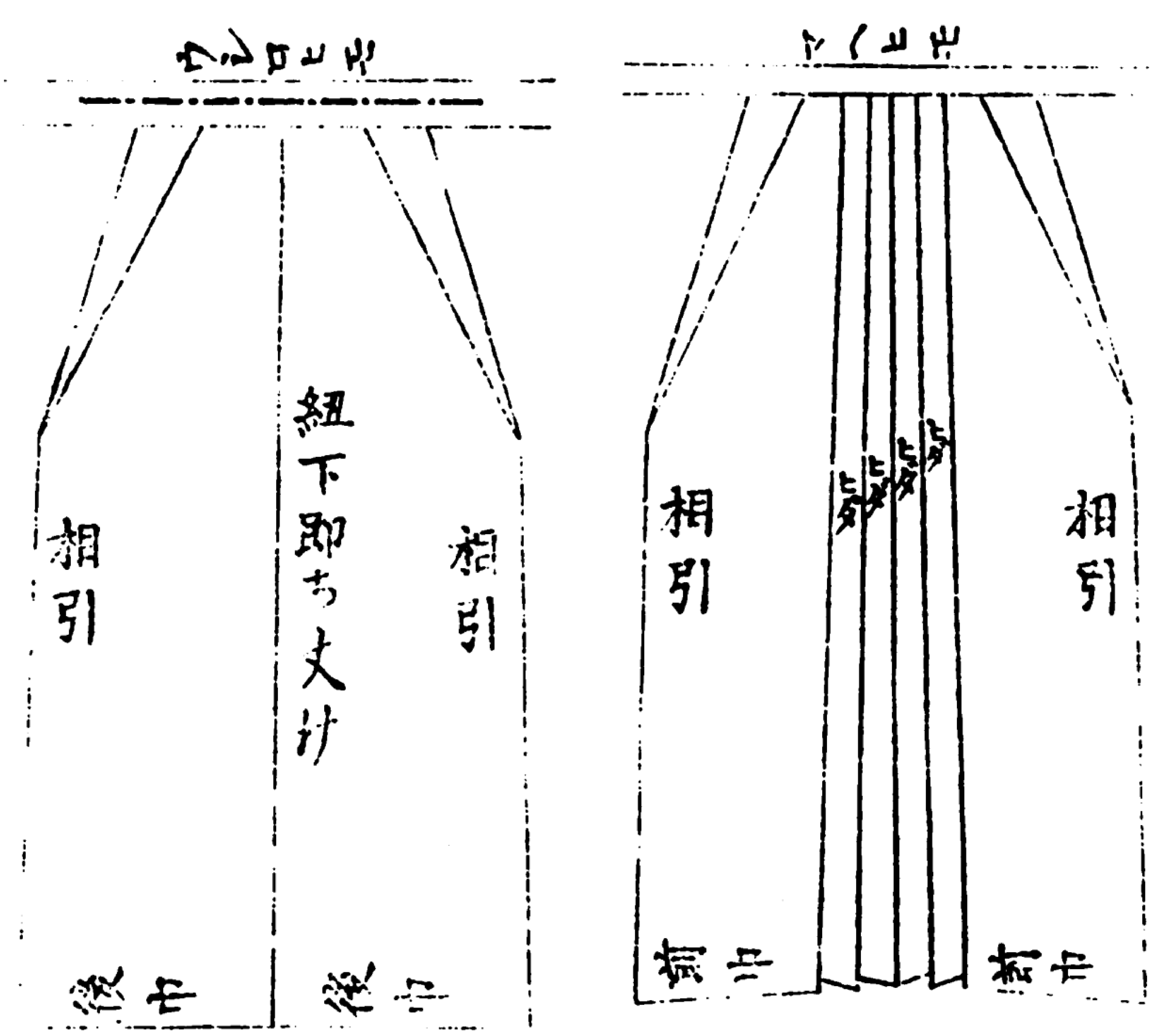
（七十二）襠なし袴縫ひ方

まづ前紐をはぎあはせ、眞中を一尺一二寸ばかりあけて他を絎けおくべし。後紐も眞中をあけおきて、絎けおくべし。但し、しんを平にしてたるまぬやうに絎けるべし。

さて、前の切の左右をとりて、眞中をはぎあはせ、後の切と両脇、即ち相引を一尺二三寸ぬひて、上

の方をわけおくべし。左右の相引をぬひ終らば、裾まはりを、一重もの丶如くにぐるりとくけるべし。絎け終らば、後を出して、下におき、後巾六寸ばかりとせば、右の方を六寸より眞直に折りて、左の後ろ、六寸の處にうち重ね、たるみしものを中にてよきやうになし、ずらぬやうにとぢつけて、前を引きかへし、前巾を大方四寸四分ばかりにし、ヒダの巾を八分ばかりとなして、よきやうにた丶むべし。但しヒダのとり方は、大人の袴を仕立つるときに、委しくときあかすべし。また相引の上は、男のは、後は裏に折りて、絎るなれど、女子のは後も前の如くして絎るなり。前後みな絎けてより、丈けを定めて、後、前の紐を表にぬひつけ、裏にて絎けつけるなり。但し、後紐の縫ひめには、大白の糸を二本にして、重ならぬやうに、しつけの如く、うちよりかくるときは、大に飾になるものなり。萬事は大人もの丶時に委しくとくべけれど、それを見て、此の襠なし袴は、よきやうに工風してぬふべし。

(ぬひ上りの圖)



造花

共立女子職業學校教授　伏見藤三郎

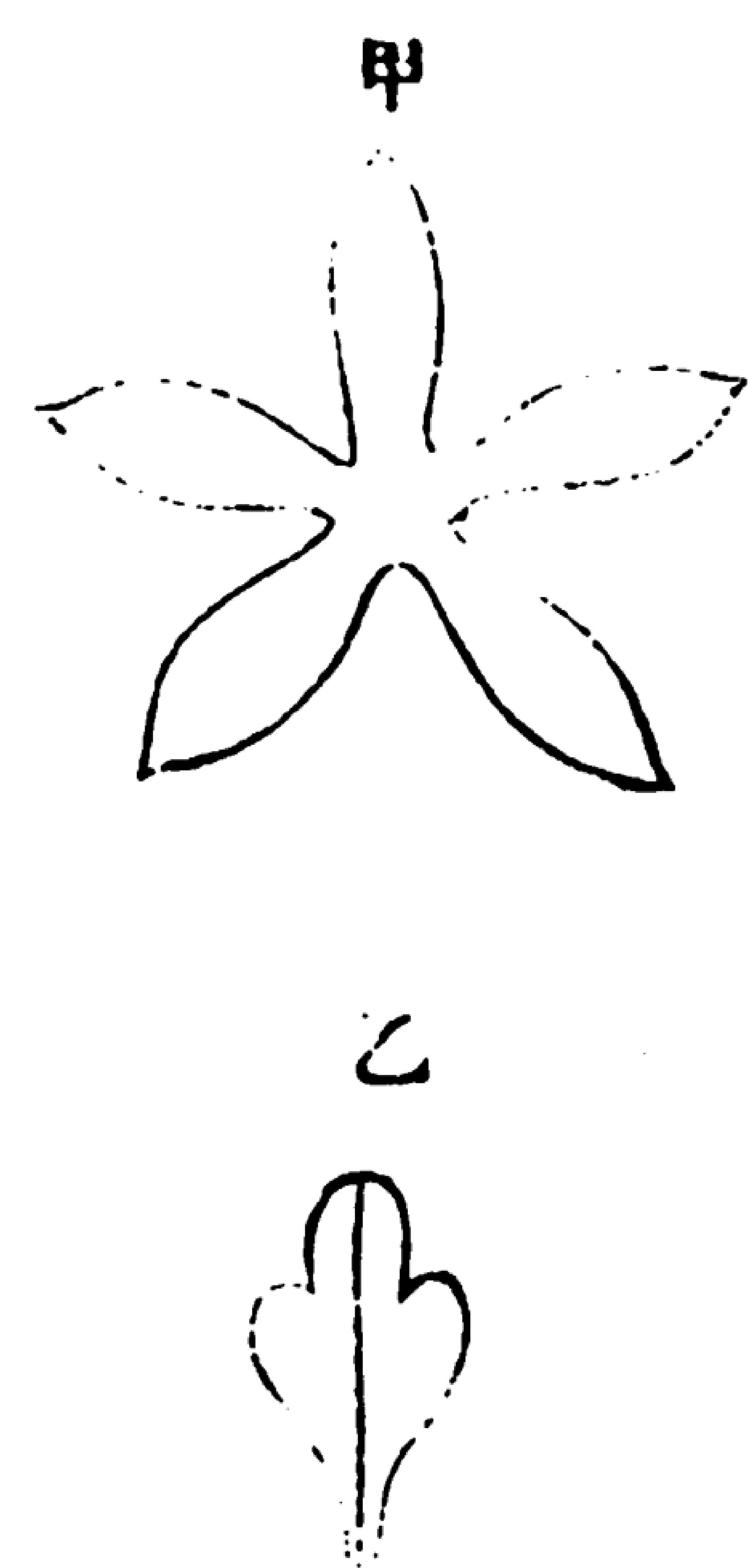
石斛

古名、スクナヒコノクスネ。イハグスリ。山中の岩石に生す。莖の長さ三四寸、叢生す。とくさに似て細く黄緑色なり。夏白色の花を開く、しらんに似たり。

滿開花の造り方、花瓣は、第八十五圖に示せる形に、甲は絖、乙は白天鵞絨にて造り。甲の花瓣は、上部の三個の切り込みを裏より瓣鏝にて引きてそりかへらし、下部の二個は表より瓣鏝にて、深く引き凹ますべし。乙の花瓣は元を「オウラミ」にて淡黄色にそめ、細き眞鍮の針金に白紙を卷きて瓣の裏につけ、表より、筋の一筋鏝にて中央の針金を夾みて引き、兩端は、小の瓣鏝をあてゝ内部にそりかへらし、后、瓣の先を裏より瓣鏝にて外にそりかへらし之を甲の花瓣（圖に示したるものを倒にして）の中央にさし込むべし。

半開花の造り方、甲の花瓣を「オウラミ」にて極薄く、全躰を染め、其の上を「アヲタケ」を薄く溶きて、先は極く薄く、中部稍濃くなる樣ぼかし、

第八十五圖



後、瓣の裏より、各切込とも、小の瓣鏝を深くあて、、みな内部につぼます樣にし、別に、針金を採りて、その先に、豆粒ほどの綿を少しく長めに着け、之を花瓣の中央にさし込みて、つぼみたる花瓣をまはりより貼り着くべし。

蕾の造り方　蕾は半開と仝じ樣にして、少しく小く造ればよし。

葉の造り方　葉は、伽羅子を、普通の葉の色に「オウラミ」七分「グリン」一分五厘「マセンダ」五厘を溶きて合せ、褪色せぬ爲に燒明礬すこしを入れて染め、形を見合して適宜の大さに斷ち、裏より針金に青紙を卷きたるものを着け、瓣鏝にて裏より葉の左右を凹ますべし。

第八十六圖



莖の造り方　莖は花瓣の元より、針金の頭に、宜しき太さに綿を卷きて、其上に青紙をまいて、節々の處は細くして、そこに、葉及び毛根を着く、

毛根は「カシトラバル」にて極薄くそめたる紙を細き針金に巻きつけたるものを適宜の長さに断ちたるものなり、尚第八十六圖を參照し、時のものなれど、實物をも見合して造るべし。

だいどころ

麵包「プッヂング」

先づ、ふるき「パン」を砕きて「コップ」に二杯程鉢に投れ、之れに牛乳三合を沸騰たせて注ぎ、「パン」を膨脹せしむるため、凡そ十四五分間、蓋を堅くなし置、後、之れを能くかきまぜて、軟塊となし、十五匁の牛酪を加へ、尚かきまぜ、四個の鷄卵を割りて、之れに少量の桂子末と、白砂糖二十匁を投れ、軟塊に合して能く混和せ、更に砂糖漬の「レモン」皮、及び「リベス」を三十目つゝ加へて、之れを蒸燒にするも、又蒸煮にするも可なり。若し、之れを蒸煮にするには、「プッヂング」を煮る皿の内面に「牛酪」を塗りて、此中に投れ、牛酪をぬりたる紙にて其上を覆ひ、皿を「スープ」鍋の中に投れ、皿の三分の二を沒する程熱湯を注し、鍋の蓋を確となし、凡そ一時間程蒸煮になし、蒸あがりたれば甘き「ソース」をかけて用ふべし、又蒸燒にするには、牛酪をぬりたる蒸燒皿に之れを投れ、かまどの中にて凡そ三十分間程蒸燒になし、燒あかりたれば、其上に能程の白砂糖をふりかけ用ふべし。

桃の砂糖煮

能く熟せざる桃實の皮を剝き、四つ切になし、種を去り、能程の水にて、凡そ十分間程煮たる後、桃十

個につき、荒目砂糖五十目を投れて、尚しづかに煮込み、桃の溶けぬうちに火よりおろし、其温氣のあるうち、鑵詰にすべし。但し十日間位は、鑵詰にせざるも貯へ置くことを得べし。



一二回のほどには、雨江快からんと思ひしに此ころの空のうつとうしき故か、病勢いよ／＼烈しうなりまさりぬ。されどなほ一二回のほどには、こころよくなりなんと思へど、新古今は、しばらく雨江が全愈の日にゆづりて、今より、萬葉集、八代集より、よき歌と思はるゝばかりを拔き出でゝ、秀歌集と呼びて、意味ばかりを解かんと思ひぬ。

秀歌集　（一）

鹽井ふく子

萬葉集卷の一の中にて

當麻眞人麻呂妻作歌

吾がせこはいづくゆくらんおきつもの
　隱の山を今日かこゆらん

○當麻眞人麻呂妻は　持統天皇の御世の人にて、歌を以て聞ゑたる人なり。吾が脊子は「吾が夫は」とれなし○何所行くらん「どこを行くだらう」と

の意なり○れきつものは「沖のもの」を云ふ。沖のものは、かくれてあれど、隱くるにかけて云ふ。「れきつもの」は「れきつ藻の」なりと說くものあれど、そは古意に非すと眞淵翁も說かれぬ○隱の山「なばりの山」と訓じて、伊賀の國名張郡にある山なり。むかしはかくるを「なばる」と云ひしなり○今日かこゆらん「今日こゆるだらうか」と想像せしなり。今日かのかは今日か明日かと疑ひをかけて、下のらんにてとめしなり。

○一首の意は、我が夫はどこを今頃行くであらう。沖つものなばりの山あたりを、今日こゆるであらふか、またはわしたかしらんなどの意にて、夫が旅路を家に居て、思ひはかりたるにて、いと情ある歌なり。言葉も心もかざらす、たゞありのまゝを云ひてすなはなるが、萬葉時代の歌のすぐれたる處なり。

輕皇子安騎野に宿らせるゝとき　　柿本朝臣人麿

四首の中、

ひんがしのぬにかぎろひのたつ見えて
　かへりみすれど月かたぶきぬ

○人麿は天の足彦國押人命より出で、持統、文武の二朝につかへ、和歌のいみじくすぐれたるより、世に歌聖と稱せられぬ。

○輕皇子は、天武天皇の太子草壁皇子の命の御子なり、○あき野は、天武記に菟田野と云々、大野に至るとあり、又式に宇陀郡阿紀神社あたりの野を云ふとあり。人麿皇子に從ひ、野に旅ねしてよみし歌なり。

○ひんがしは「東」なり○ぬにかぎろひののぬは野

なりかぎろひは日影のちらくと、けぶりの如く見ゆるものにて、此處には明けそむる光りを云ふなり○かへりみすれば「ふりかへり見れば」と云ふ意なり○月傾きぬ「ありあけの月がれちて見ゆるとの意なり。

○一首の意は、東の方を見れば、はやも野にかぎろひのあけそむる光りが、ちらくと見え、さて、ふりかへりて西を見れば、ありあけの月がまだ傾きながら殘り居るとの意にて、廣野にやどり、實際の景色をよくよみなして、調高く、姿大なるいとめでたき歌なり。

慶雲三年丙午幸二于難波宮一時

志貴皇子御作歌

あしべ行く鴨の羽かひにしもふりて
寒き夕べはやまとしおもほゆ

○志貴皇子は天智天皇の御子施基の皇子の事ならん、あしべは、磯邊の古言なり。即ち海岸の事なり。葦のほとりとかくは古意にあらず僻言なり○鴨の羽がひに「羽がひ」は「羽交」にて、互みに羽をうちがへたるを云ふなり○やまとしおもほゆやまとしのしはつけ言葉にて意味あるにあらず。思ほゆの下にはるを加へて、「思ほゆる」と云ふ意なり。

○一首の意は、羽を交はして海岸を遊び行く、鴨の羽の上に霜がふつて、寒きよるは、我れも、妻子の住み居るやまとの方が思はれて、とかくに故郷に歸りたく思ふ。他鄉秋夕の感、まことにしかあるべきいとめでたき歌なり。

長屋王作歌

宇治間山朝風寒し旅にして
ころもかすべき妹もあらなくに

○長屋王は高市皇子命の御子なり○宇治間山は吉野にあり。妹もあらなくにのなくはぬをのべたる言葉にて、其下に故にと云ふ意を入れて、「あらぬ故に」と云ふ意に解するなり。むかしは男女衣を互にかりて着る事常の習ひなりしなり。

○一首の意は宇治間山の朝風がいたく寒い事である、旅に出て居れど、衣をかしてくれる妹もあらぬ故にとの意にて、妹は、妻、またはなれし女などを云ふなり。「あらなくに」と上へかへしたる、いとよし、旅中の述懷あはれなり。また男女の衣服異ならずして、互にかしわひし當時の風俗を知るべし。

前回漢文講義正誤　黒澤弘忠な出雲の人させしは伊勢の人の誤

漢文學講義（九）

大林弘一郎

七、北條時頼儉薄　服部元喬

元喬字は子遷、南郭と號す。通稱は小左衛門、山城の人、荻生徂徠に學び、初柳澤侯に仕ふ。寶暦九年歿す、年七十七なり。

平宣時、老後謂人曰、昔時相州、一夕見邀、尋使再至曰、既夜、不必裝束、願疾見臨、乃著故直垂去、至則相州自挈酒、出曰、偶有此物、不可獨酌、聊復迎爾、恨無下物、廚下或有餘食、既己中夜、人靜、煩君唯所自得、余乃秉燭入廚、徧索無肴、僅見皮上土器、豆豉箸餘、藥在其中、試且擧至、相州曰、亦足矣、乃暢然對酌、遂至歡醉、其淡薄率如此。（大東世語）

この篇も前篇と同じく徒然艸を譯したるものなり。原文にいはく、

平の宣時朝臣、老の後、むかしがたりに、最明寺入道あるよひの間に、よばるゝ事ありしに、やがてと申しながら、直垂のなくて、とかくせしほどに、又つかひきたりて、直垂などのさぶらはぬにや、夜なれば、ことやうなりとも、とくとありしかば、なえたる直垂うちうちのまゝにて、まかりたりしに、銚子にかはらけとりそへて、もて出で、此の酒をひとりたうべんが、さうざうしければ、申しつるなり。さかなこそなけれ。人はしづまりぬらん、さりぬべき物やあると、いづくまでも、もとめたまへとありしかば、しそくさして、くまぐまをもとめしほどに、臺所の棚に、小土器に味噌のすこしつきたるを見出で、是ぞ求めえてさふらふと申しゝかば、事たりなんとて、心よく數獻に及びて、興に入られ侍りき。其の世には、かくこそ侍りしがと申されき。

この文を對比して見れば、大體の意義は、了解せらるべし。猶その詳なるをいはゞ、

平の宣時は、即北條氏の一族にして、時房の子なり。相州は、相模守にて、時賴のことなり。邀へらるとは迎へらるゝと同じ。直垂は、當時武士の常服なり。下物とは酒のさかなのことなり。厨下とはくりやのこと、即臺所なり。豆豉とは豆にて造れる味噌なり。擧けて至るとは、持ちて來るなり。亦足矣の上にこれにてもといふ語をつけて見れば、意義明なり。暢然とは、暢は和暢などゝつゞけて、のびやか、うらゝかなどいふ意味ある字なれば、よくうちとけて樂める狀を形容して暢然といふなり。歡醉はよろこびてたのしく醉ひたるをいふ。淡薄とは淡然として物事に奢らず、極めて、

質素にすることなり。槩は概に同じく、おほよそといふこゝろなり。

さて、この一篇は、全く當時の物語として、記したるものゆゑ始より終りまでみな當時の言詞のまゝにして、その中に、時頼との應對を寫したるなり。記者の言詞は、始の一句のみなり。誤讀して、その意義を失ふことなかれ。

時頼の儉素にして、しかも政事に心を用ゐたるものは、蓋母の教育大に與りて力あり。讀者、前篇と參照して、よく考察すべし。



浮世いかた舟（續）

作者不詳

浮世坊京うち參りの事

今はむかし、浮世坊は京のすまひもなりがたし。諸國修業と心ざし、墨染のころもをたゝかからげにからげ、なむあみだ笠引かぶり、ももくづゑにすがりて立出たるが、かくぞ思ひつゞけける

心よりおこらぬからに道心の
　　ばだいのたねもみよさなるべき

とおいとつゝ、さらに都のすまひもけふをかぎりの

思ひでに、京うち参りをせはやと思ひて、みなみ西の端より東寺をはじめてをがみめぐる、五重の塔婆くはんぢやう堂より羅城門を見めぐり、本堂の正めんにまうでゝふしをがみ

すてはつる我身どうしの小車と
　うきよをめぐるためしなるらん

と、かくし題によみつゝ、北につゞくや大通寺、かの島原の御せんせい、むかしになるやそなたぞと、心むかりにながめやり、ちぎりし君がおもかげに、さすがなごりはをしけれど、また、なりはつる身のゆくへ、むかしをくやむこゝろ有けれど

都をむけふ立いづるなごりより
　君ゆゑすてし金のをしさよ

水薬師をうち過て、五條西洞院には天神の御やしろ、少彦名の御神のおとたれ玉ふ所とて、年に一たび節分の夜のみ、京中の貴賤わゆみをはこぶ。白米なちをかふて、年中の疫をはらふ。その餘の日はまうできたる人もまれなり。宮居もあれはてゝ。今は造営の勧進ありときゝ。

參り下向すくなひこなの御社
　神さびたりと是をいふらん

なはひがしのかたからす丸に、因幡堂あり。こゝは彌生のはしめつがた、花もやう／＼ほころひぬらん。

さく花をみすてゝ京を出ていなた
　たうよくものと人のいふべき

四條に壬生のちざうれはします。すゝめの杜もほどちかし。三條大宮に神泉苑をうちながめ、六角堂は、はるかひがしに思ひやり、二條の城をめてになし、七本松をうちこえて、北野の天神にまうでけり。紅

梅どの老松を心しづかにふしをがみ。

鳩の戒の事

今はむかし、浮世坊さて此うへは、いかにすべきとあんしけるが、きつと思ひ出したることあり。京にも田舎にも、はとのかいと云もの有て、よろづの事、聞をあはせ、さながら其根に入たる事はひとつもなけれども、又しらぬこともなし。あれこれになりかへし〳〵、うろをつきて世をわたる。是をはとの戒となづくること、鳩は人里ちかくすむものにて、雨のふりはれをよくしりて、雌の雄をれふ時は雨ふり、雄の雌をれふ時は雨はるゝとかや。それによつて、鶯の巣をつくること甚たうつくしく、篠のはを、人の髪すぢにまとひ、そのなりはまろくして底ふかく、餌ぶこのかたちに似たり、はと是をならはんとて、うぐひすにちかづきて巣のつくりやうをみるに、はそき竹ぎれ、しのをそれをしたにわたし、そのうへに巣をかくる。それまでも見とゞけす、竹しのをわたしたるばかりをみて、もはや心得たりと思ひ、おのれ巣をつくる時は、木のゑだにしのをそれ四五本をわたし、そのうへに木の葉をしきて卵をうむ。かひ子しのをそれをわたしたる間よりもれおちて、うちくだけてそだちがたし。口傳も師傳もうけずして、たゝ見および聞をよびたるにまかせて、根にいらぬわざどもを、しらぬ事なくはゑがはなるは、はとのすにたとへたり。又秋になれど、鳩すなはち鷹となりて、たかのまねするものなれど、時にしたがひ、れりによりて、いろ〳〵になりかはり世をわたるわざをいたし、人をへつらひだますものを、はとのかいとは申也。さらど、まづくすしになりて見どやと思ひ、ころもをぬぎてだうふくをちやくし、丸薬、

こぐすり、ふところにいれ、ざいがうあたりをへめぐりけり。

薬ちがひをせし事

今はむかし、うき世坊ある在郷にゆきて、しかるべき人の門にたち、是は諸國修業のくすしなり、何わづらひなりとも、脉をとり薬をあたへ、灸をも點じてあとふべしといふ。折しもその家に此程いたはる病人有、さらばとてよびいれたれば、兩の脉しさいらしくとり、立のきていふやう、凡、きやくに浮沈遲數の四有、人の兩の手に寸關尺の三部、左右六脉におの〳〵浮沈遲數の四を乘くれば、六脉には二十四脉これ有。是をこまかにとりわけて、五ざう六ふの病のしな〳〵、風、寒、暑、濕、氣、血の虛實、內傷、外感のもとをたゞしくして薬をあとふるに、いづれの病も癒ゑずといふ事なし。中にもこの病は、悪寒はつゞつう有。をかんとはさむく、はつとはねつきの事かしらのいたみ是有。脉は又緊弦なれば、ぎやていといふわづらひ也といふ。家主きゝて、ぎやていとはいかなる名にて侍べるやらんととへば、おこりのことなりといふ。それは、瘧病とこそ申せ。又すこしはらもいたみ侍べれば腹ぎやていにて侍べるかといへば、それも久しくおちかねわづらへば、後には波羅僧揭諦なるものぞ、はやくきり薬をもりたるがよきなりとて、何はしらず、こぐすりをあたへたるに、のむよりはやくとぎやくして、病人氣をとりうしなひ、そりかへりければ、浮世坊きもをけし、うら道よりにげて、足にまかせておち行けり。

年中風雨考節錄

井上頼文寄贈

天保十二年辛丑歳晴雨考(續)

○五月小　今月、桃、杏、李、梅等の核をよく〳〵洗ひて蒔けば、其の木生じて花實最うるはしくしよし、今月田植時分地震あれどよし、今月來月北にて旱すれど、秋に至り長雨あり。夏長雨は秋晴多し。

○朔日晴天　今日晴天なれど豐なり、雨なれど歉なり。二日陰雨。三日前にれなじ、四日雲多し、夏至五月中巳二刻に入、夏至在端午前主雨水調、すべて夏至上旬にあれど米安し。今日雷あれど六月旱す、今日雨ふれど一點千金に當るといへり、大豐年をいふなり。五日風あり、今明日の中風雨の變多し六日晴天。七日晴天にして雲多し、今明日の中風あれどつよし。八日陰冷、九日晴天。十日陰雨、八専のをはり。十一日晴天、今日雨天なれど秋洪水あり十二日晴天にして雲多し。十三日陰雨。今日雨ふれど秋米穀高し、今日風の變多し、又今日を竹醉日といふ。竹を移すによろし。十四日曇暖、今日を出梅とす、梅雨の氣盡るなり、今日卯に當る風雨ありどあり。十五日風あり。今明日の中風雨の變多し。十六日陰雨。十七日陰冷。十八日晴天。十九日前におなじ。小暑六月節未七刻、今明日の中風あれどつよし、今日壬申に當る陽日なり、雨天にてもよし。若陰日なれど雨を忌む、又今日小雨ふるは凶、大雨三日もつゞくは却てよし。廿日晴天にして雲多し。廿一日晴暖。今日海上を愼むべし。二十二日風つよし。二十三日雨天。二十四日暖風、今日丑に當る雨天なりといへり。廿五日風つよし、今明日の中風雨の變多

し。廿六日冷なり。廿七日前におなじ。廿八日雨天なり。廿九日冷風。

○六月大　今月虹あれど秋に至りて米高直なり。

○朔日晴暖なり。雨ふれど豐なり。二日雨天、土用酉の八刻に入る、今明日の中風あれどつよし。又土用中雨多ければ冬土用中ひでりなり、又土用中南風吹て北へ吹返しなければ寒の半に大雪あり。三日風強し。四日前におなじ。五日冷なり。大暑六月中戌四刻に入六日晴暖なり。晴天なれど豐なり。雨天なれど秋水を主どる。七日風つよし今日丑に當る土用入の日より六日の内に丑の日あれど凶年といへり。早く秋氣催すゆゑなり。八日冷風今明日内雨ふれど麥安し、今明日の中風雨の變多し。九日晴暖なり。十日雨天。十一日冷風十二日風つよし。今日雨ふれど長し。十三日晴風。十四日前におなじ。今明日の中風あれどつよし。十五日冷なり。十六日晴天、今月の月蝕は旱を主どるといふ。十七日風つよし。十八日晴暖、今明日の中風雨の變多し。十九日雨天。廿日風つよし。廿一日冷風、立秋七月節丑一刻。今日涼風あれどしよ今日雷あらど稻あしく今日風雨の變多し。廿二日風あり。廿三日冷なり。廿四日前におなじ。今日風の恐れあり。廿五日晴暖。廿六日前におなじ。今明日の中風あれど強し。廿七日雨天。廿八日風つよし。今日雨ふれど長し。廿九日冷風三十日雨天、今日より七月十一日迄八専、又今明日中風雨の變多し。

○七月小　今月虹あれど五穀高直なり。

○朔日風あり。二日冷なり。三日晴暖なり。今日霧あれど豐にして草木榮盛す。今日卯に當る、今月三卯あれど大に熟する事を主どる。又今日風あれど旱な

り。四日前にれなし、今日辰に當る風雨ありといへり。今日松を伐れど虫いらず。五日雨天、今日雨ふれど四十五日日を見ず。六日風又は地震處暑七月中夘六刻。七日冷なり、今日雨ふれど洗車水と名づく、年豊なり。八日雨天、今明日の中風あれどつよし。今日庚申に當る、今日米安けれど年中高下あり。九日風あり。十日冷なり、今日風雨の變多し。十一日晴暖なり。八専のをはり。十二日冷なり。十三日雨天。十四日晴暖。十五日風あり。十六日風又は地震、今日月上る事早けれど熟す、遲けれど秋雨至る十七日晴暖、二百十日なり、今日より前後に折々風吹事あらば難なかるべし、若前後靜なれど今日却て大水の恐あり。十八日風あり。十九日冷なり。廿日前にれなし。今明日の中風あれどつよし。廿一日晴冷白露八月節午三刻、今日雨ふれど穀を損す。廿二日暖かなり。廿三日冷雨廿四日晴冷、今日子に當る雨ありといへり。廿五日冷風。廿六日冷雨。廿七日曇天、今日風吹けば日和よし。十八日冷なり、今日辰に當る風雨ありといへり。廿九日晴冷。

○八月大

○朔日冷雨。今日雨あれど來年麥よし。又今明日中風雨の變多し。二日暖なり。三日晴冷。今明日の中風あれどつよし。四日冷風。五日冷雨。六日暖天なり。今日より十二日迄彼岸秋のひがん九月にかゝらざるは豊年なり。七日暖なり。秋分八月中申八刻に入。又今日を社日とす。今日雨ふれど來年豊なり。八日冷雨。今日己丑に當る風ありといへり。九日冷風。十日暖なり。十一日晴冷、今日水の深淺を見て來年の水旱を卜すべし、又今明日中風雨の變多し。十二日冷風。十三日冷雨。今日雨ふれど長し。十四日

冷風、今日風の恐あり。十五日前におなじ。今日晴天なれど來年水多し。月なければ蚌に胎なく蕎麥實なし。今明日の中風あれどつよし。十六日晴天にして折々小雨或は雷。十七日晴冷。十八日冷雨、今日を潮生日といふ。前後必大雨あり、横港水と名づく。十九日暖なり。二十日冷雨。廿一日晴冷、又今明日中風雨の變多し。廿二日晴風寒露九月節亥五刻廿三日晴風。廿四日大雨。廿五日前に同じ。廿六日陰風。廿七日まへに同じ。今明日の中風あれどつよし廿八日陰雨。廿九日密雲多し。今日雨ふれど長し。三十日晴風。

高崎正風大人講話筆記

（明治廿九年四月十八日夜於宇田翁宅）

以上は宇井氏と一場の談話の概畧なり。さて歌は理窟を先としてよむ事これあるまじきことなり。後世斯道の衰へしは、種々の原因あることなれども、道理にて歌を論ずる弊害もその一原因たる事は免るべからず、そも道理道理といへども、唯目前の理窟のみにて、眞理にあらず眞理は奥深くして容易に見出し難きものなり。この眞理にもあらざる表面の理窟のみにわたれる時は、所謂纔に理にわたれど天地の感を塞ぐなり。後世歌の學問は開けたれども、人丸もうまれず、貫之も出です、只歌は一の藝道となり、流派を立てゝよむ事となり、只師匠と同さまの歌をよしと思ふやうになりしは誠に慨くべきことなり。この師匠によく似たるをよき歌なりといふことは、實に愚なる事なり。斯くては歌は全く死物となりをはるなり。歌は活物にて、その人によりその境遇により、千差萬別なるが當然の事なり。おほよそ、天

地間の活物に、一として寸分違はずといふものはなし、皆よく似たる中にも、箇々別々多少の差別ある事なり。第一確なる證據は、この人の面なり。世界にある無數の人一人として他と寸分違はぬ面の人はなし。これによりてこそ、その人の特色ありて、誰彼を分別せらるゝものなれ。さらずば、甚紛らはしくて、差別に苦しむ事なるべし。筆をもて人の面を描くに、千人以上の人の面をかきわくる事難しと聞く。是畫は死物なるが故に然るなり。禽獸の面などは人よりして見る時はいづれも同一の如くなれども、これも千差萬別なり。わが知れる人に極めて鳥を愛する人あり。常に雀の面を見知れりとて、今彼處に鳴くは昨日此處にて見し雀なりなど、善く鑑別せり。雀の面なども、注意して見るときは、同一ならずとぞ。馬も亦然り。己も馬を飼はぬ程は、馬の面は皆等しきものと思へりしを、みづから愛養して之をみれば、いづれも異なる容貌ありて、少しも紛るゝものにあらず。これをもて考ふる時は、その出來工合によりて異なるが活物の常態なり。歌亦かくの如し。その人その人の性情、その時その時の感懐によりて、千差萬別なるべきなり。然るに、人まねして師匠と同じ調の歌よまむなどと思構ふる事は、いと愚なる事なり。

貫之、躬恒、友則、忠岑などの歌、深く意をとゞめずして見る時は、皆古今時代の調にておなじ姿の如く思はるれども、その家集を熟讀翫味する時は、四人おの〳〵別々の風調あり。これ歌の活物にして死物にあらざる證なり。

次に「力をもいれずして、天地を動かし」と云ふ語あり。これも、この序の眼目とぞ云ふべき、中にも力

をも入れずしていへる語味はふへし。力をいれてものするにはあらず。眞情を、偽らず飾らず云ひ出でたるが、やがて天地を動かし、鬼神をも感ぜしむるなり、眞情より出でずして、理窟より發したる歌にては、いかでか斯くの如きを得む。

以上、かの序を翫味せるにつけて、聊、紀氏の精神の有る所を窺得しかたはしを述べしのみ。これ決して己が發明せし事にはあらずかし。

己が御歌所長として諸君に望むは、以上述べたる所の眞正の歌をよみ出でられむ事なり。その眞正の歌をよむには、この紀氏の金科玉條として書きおかれたる序文をよくよく翫味するに如くはなし。これを外にしてよき歌の出來る事あるべからず。諸君之を歴史上に考へ見られよ、今の大御代の如く、萬民詠進する所の歌を 親しく 天覽あらせらるゝが如きは、曾て例なき事なり。かの曾根好忠が子日御遊に推參せし事の有樣を見ても、地下の者の歌の容易に天聽に達せざりし事は知らる。今や 聖天子の斯道を奬勵し給ふに遇ふ。實に眞の歌を奉獻して、聖慮に答へ 奉 るべき時ならずや。さて又「いにしへのよゝのみかど、春の花の晨、秋の月の夜毎に、さぶらふ人々をめして、ことにつけつゝ歌を 奉 らしめ給ふ。あるは花をこふとて、たよりなき所にまどひ、あるは月をおもふとて、しるべなきやみにたどれる心々を見給ひて、さかし、おろかなりとしろしめしけむ。」とある、これも今日の歌にては當らぬ事あり。内閣大臣たちに、歌よまるゝ人は稀なるが、されどとて大臣は愚なるにあらず。又巧に歌をよみて門人あまたもたる人は皆賢者かと云ふに、決して然らず。この「さかしおろかを知る」とは人の氣質を知

るといふ程の事なり。何卒、各自の氣質を分明にしろしめさるべき程の歌をよみ出で奉らまほしきことなり。又思ふに、歌は言葉の道とのみ思ふべからず。是實に人情の學問にして、人間の道といふも決して過たず。支那にても、孔子は詩を重んじ、詩書禮樂と、經書の上位におかれ。又論語に、詩を學ばざれば、以てたつことなし。商やはじめて詩をいふべきのみなど云はれたるをもても知るべし。所謂後世の詩歌の如きは、決して人情の學問にはならざるなり。もし後世の詩歌を、孔子、貫之に示しなば、何とかいはむ。さて、人情學に就きて一話あり。東京増上寺の住職にて、福田行誡上人といへりしは、七十餘歳の老僧にて、耳遠くして、人と對話するに石盤を備へおき、それに答を需めき。この人、かつて己が門人たらむことを乞はる。己例の如く、斯道において、師弟などいふ事のあるまじきよしをいひ、且さきに申しゝ如きことを二三話に及びしに、上人いふ、先生は佛道を修行せられたるか。己答へて云ふ、いな和漢の書はすこしばかり學びたれども、佛道は露知らず、若き時は水戸風の學を好みたれば、いはゞ守屋大連の黨にして、經卷などは手にしたる事なしといひしに。上人、さるにても、先生の説の佛道の奥義に異なる事なき不思議さよといふ。己答ふ、そはさもあらむか。釋迦は一切衆生を濟度すといひ。孔子は、この民をすくふといふ。兩者ともに人情を本として人を感化したるなれば、釋迦も孔子も、共に人情の大學者なり。歌、即、人情の學問なる故、兩者と少しも違ふ所ある筈なし、上人何ぞ己の門に入ることを須ひむ、佛道、即、歌道なりといひしに、上人も大に悟られたりき。すべて人を異見

するにも、人情をもて人の心腹内に推入るゝ時は、わが言その耳に入り易く。政事を執る人も、人情をもて萬民を馭する時は、萬民悦服せむこと疑なし。已この道を研究するにつきて、人情は人道の大本なることを悟りき。

前條述來たるは長かれども、大意は左の如し。

歌をよむ人、これを藝道と思はずして、人情の學問なることを悟り「見るもの聞くもの云々」といへる言に心を留め、已か感情の發動する儘を、僞らず、飾らずいひ出づべきものなり。斯くして此道の發達を謀り　聖天子御奬勵の御趣意に報い奉らるゝやう心かけられむことを切に諸君に望むところなり。

編者誌す。この篇は故の高畠志貴婦刀自のものしおかれたる論語章句の歌を、子の千畝ぬしが、こたびすりまきとなして家の子たちにわかたれたるなり。猶詳くは千畝ぬしのはしがきにつきて知り給へかし。

かたみの蕨

志貴婦遺稿

今年は、母の十七年の忌になりぬれど、なにくれとむかしをおもひ出で、記しおかれたる物ども等、づゝら籠の中よりとうでつゝ見もてゆくうちに、このひと巻は、某の女の、よごとに、論語てふ唐文をよみて、此章句を、歌によみうつしたまはらむやとこへるがまに〳〵、さとりやすきを旨としてよみあたへられたるなれど、たゞごとによみつらねてにほはしきふしもなけれど、さすがに、しみのすみ

かとなしはてむも、いとあたらしく、はた、まご子らが庭のをしへのひと草にもせむやと、かく摺まきに物しつるは、たま祭の手向く料にもとりそへて、なき人のこゝろをもなぐさめまゐらさむとてのしわざになむ。

明治三十年の春　むぎのやのちうね

論語章句の歌

學而時習之不亦説乎

飛鳥の諸は羽づかひやむまなく
勉め習へむたのしくもある

有朋自遠方來不亦樂乎

れなし道まなべむ友としきしまの
遠近びとのとふぞたのしき

人不知而不慍不亦君子也

人によしまられじとても浪たつな
沖のれは舟こゝろゆたかに

其爲人也孝弟也

たらちねの親にまことを盡す身は
世をみたるべき事はこのまし

君子務本本立道生

いつくしみ情をもとゝまもる人は
よろづの道のすゑぞまさしき

巧言令色鮮矣仁

ことの葉の花の色香にまよふなよ
まごゝろ人はすくなかりけり

吾日三省吾身

日に三度かへりこそ見れ正しきや
まごゝろにして學びゆくやと

道千乘之國

玉しきの庭に出ゝてもたみくさの

つとむる時を思ひこそやれ

弟子入則孝

君と親にまごゝろつくし其のひまの
をりにこそよめ世々のふる文

賢賢易色

賢きをめづるこゝろのまことある
人こそ人のこゝろなりけり

君子不重不威

たれもみなあふぐばかりに靜りて
嚴のごとくある人やきみ

主忠信無友不如己者

いつくしみまことの心あるじとし
我よりにぶき友にむつぶな

過則勿憚改

過はあやまちとせよわすれしも

とみにことわれさえのある人

愼終追遠民德歸厚矣

終りまでつゝしみ遠くれふときは
民もまたがひいつくしみせむ

夫子温良恭儉讓以得之

あなたふとこの五つこそ人皆の
あふくひしりの御いつなりけれ

父在觀其志

たらちねを思ふまことの深ければ
あさき心にまかさゞりけり

禮之用和爲貴

梓弓はるはのめかすうめが枝に
なく鶯のこゑののどけさ

信近義言可復

道しあらば契りしことをたがへても

君子食無求飽

のりしたしみは其内にあり

何事もあくまでにせずうま人は

まなぶ誠をまたでれてなふ

貧而無諂

やれふすまかづきぬるよも月影を

しのぶ心はそらにすむらむ

詩曰如切如磋

日々にこゝろにこゝろきりみがき

打つゝとぎつ後きたへとや

賜也始可與言詩

いまよりはふるき道芝しげく〳〵に

ふみやならさむ古きみち芝

不患人巳不知患不知人

わが誠しられじとてもなげかじな

人の心をわれしらずして

為政以徳

眞心をつとめはぞこせあまつほし

夜ひるめぐり護ります見て

詩三百一言以蔽之曰思無邪

横さまにつかはぬはりの一筋に

百重の錦つゞりあはさむ

道之以政齊之以刑民免無耻

政いましめのみはかひぞなき

まことの法を民にはぞこせ

四條流の諸禮といふ事を論ず

有住齋門下の萱

四條流諸禮といふ言を、讀賣新聞（六月二日）紙上に於て、始めて見ることを得たり。こは、南葛飾郡本田村の人、中村龜太郎君の傳ふる處にして、即

君の語りたりといふは

諸禮と云ふ事は、神代の頃よりありたりといへど我四條流は、新羅三郎義光の制定せる所なり。(小笠原流もまた其頃より一家を成せり）義光は武門の生れなれど、宮中の儀式を掌るに便ならざる爲め、之を四條家に屬せしめ、爾來四條流と稱し同家に傳はりて式部卿の管する所となり居りしが幕府の頃に至りて、小笠原流を武家の諸禮と定めたるに依り、四條流は高家に傳はりしが、爾來小笠原流は漸次勢力を得、今川流、織田流、松岡流、水戸流等の分派を生ずるに至りたれど、四條流は僅に、伊勢流、吉良流の二分派を出せるに止りたり。されど、其流義も重に宮中に行はれ、武家に於ては、元祿の頃意地惡ると囃されたる吉良上野助のみ、四條流の名流にして、其書類秘傳の如き頗る見るに足るものあり。

余は幼少より諸禮を好み、父祖箕裘の業を嫌ひ、先づ直入翁を京都に叩き、懇切の教を受け、後四條流の最も賴むべき流義たるを知り、百方取調べたる末小笠原流一派の諸宗匠を訪問して研究する所あり、徳川氏覇權を握りし頃、諸侯皆小笠原流を用ひながら各々家風を混用して、眞の小笠原流なるものなく、二流六派の諸禮何れを以て日本普通の禮法となすべきやを決し難く、爲に家庭教育中最も欠くべからざる禮儀は、漸次衰頽したるを慨歎し、余は他流の宗匠へも意見を述べて、試みに男禮は小笠原流に、女禮は四條流に據る事となしたるに、漸く日本普通の禮式として通用し得るの端緒を得たり、仍て之を、京都、大坂、兵庫、三重其他各府縣の教育家に語り置きたりと。

是、素より新聞紙の傳ふる所にして、深く信を措き難しといへども、果して斯の如くなれど言ふべきことあり。

聊、諸禮といふ事は、何々をいひたる言とせるにや近き世の人等の所謂、座敷、立振舞、書札の禮、香茶の禮などの諸禮とは異ならん。思ふに、弓馬の禮、連歌の禮。庖丁の禮、鞠の禮、鷹の禮、其他總ての禮を諸禮といふにやあらん。宮中の御儀式、陸軍海軍の武禮。貴につけ、賤につけ、殘るところなき禮をいふにやあらん。神代の頃よりありたりといへどとは、いひたらぬさまなり。匐匍禮の如き、神代より今に傳はれるは、皆人の知りたる處ならずや。我四條流とは、如何なる傳を受けていへる詞にや、四條流と世に云ひ傳ふるは、光孝天皇の御代に飯膳の事を修めて、今の世までも傳へ給へる四條中納言を慕ひて、其定め給ひたる式を學ぶものを指していふ詞なり。しかるを、諸の禮を修めたるごとくいひなすは、さる古文書を得て、動きなき傳をへたるによれるにか、聞かまほしきことなり。又、義光の制定せる所なりといはれたるは、笑ふに絶えたり。義光は紀元一千七百年代にありて、弓馬の禮を祖として、小笠原家の弓馬禮を以て、始めて世に知られ四條流は、既に一千五百年代に起りたりしなり。義光の制定せるを傳へしは、四條流の祖、藤原朝臣山蔭卿の裔孫ならで、四條家の方へと傳へしものか、さあらんには、未だ四條流として世に聞えざる家流なれど、さもありぬべし。世に聞えたる四條流の裔孫は、仙臺の伊達家なり。又流義を近く世に傳へたるは、足利時代に、細川勝元園別當大草某あり、德川時代に、黒田の三川あり、又石井某、鈴木某

等ありて、其の弟子、海内至る處に、今に其の流儀を傳へたるなり。是を以ても、弓馬の術の祖なる義光の定制せる所ならざるを知ることを得ん。小笠原流も亦其の頃より一家をなせり。とは何でとぞ、小笠原流の系圖に、自二新羅義光一傳二弓馬藝一。とあるな後醍醐天皇御宇、貞宗に天下の師範たれ、との勅ありしよしを記せるを以ても其の由來を明にすべし。又、式部卿の管する所云々四條流は高家に傳へり。四條流は僅に伊勢吉良の二分派の出だせるに止まりたり。其流儀も重に宮中に行はれ云々などいはれたるは、甚だしき異説なり。

かゝる説どもを以て熱心に修められたる四條流こそ習はまほしけれ。漸く日本普通の禮式として通用し得らるゝといはれたるもをかし、各府縣の教育家に語り置きしといふもをかし。

次いでいはれたるは

在京の諸華族、及陸海軍將校、並に諸名家中の有志は、頻りに余の東京に止どまらん事を勸めらるゝが、余は未だ東京人士が果して余の流義を修むるの志あるや否やを疑ふなり。と

かくも得意なる四條流の世にいでたるは、うれしき極にぞある、されど、異説にあらざれど、東京人士といへども如何でか修むることを好まざるもののみならんや。

終りにのぞみて又

要するに、禮儀は、周禮、延喜式等、あらゆる本邦の古儀を撰擇して起したるものなれど、之を心に約する時は孝貞忠信となり、之を行に放つ時は工藝技術の生産事業（婦人の裁縫、折もの、組もの等の類を指す）となる。

など、述べらる。周禮を第一にあげて、孝貞忠信など、むつかしげに言はれたる所、四條諸禮とはさぞあるらんと推思せらる。されども、異國風をもまじへて成りたちたるものは、慨いかな我が大日本の國風なる神隨の禮の本旨には副ひ難きを如何んせん。乞ふ、名論もあらむ高教を給へかし。

かりそめにも、一國の禮儀を敷敎せんとするほどのもの、固より、我が國諸禮の沿革由來をも詳らに辨まへざる筈なし。此等の異說、恐らくは訪ひたる人の誤聞ならんと思ふ。故にれてこがましくも、いさゝかこゝに論ひてその迷ひを解くになん。

暴風のたまもの（續）

三好越南

既に翌朝となりしも、なほ波荒らけれども漁船は出帆せず。また一日を空しく此の島に送ることゝはなりぬ。左れど、此の長き日を無氣に消さんも本意なきものから、此の島には曾て野馬のありとし聞けど、そを一見するも亦一興なれどとて、一同は草鞋得々此の家の左傍より村に入りしが、村盡きて丁余一宇の神廟あり、這は矢所神社と稱して此の島の氏神なる由、何を祀りしものなるやは知らされども、堂宇の構造は思ふに優りて雅麗なりし。一同は此の社の裏なる徑に傍ふて山に入りしが、山は頗る峻岨にして、崎嶇たる羊腸は屈曲定りなく、並木の古松は天を遮ぎり、嘗て此の島の物産とし聞ける大竹は左右の山々に限なく繁茂し、四山最と幽邃なるが中にも、實にや山中暦日なく、時知顏なる鶯が谷間〳〵に啼き誇り、谿谺たる亂崖には香り床かしき桃花が二枝三枝咲き初めて姥が住むてふ金時山も左こそと思ひ合されける。こゝより先きは道益險しく

して或はM字形となり或はS字を横臥したる如く。一歩一喘漸くにして西岸なる釜山と稱する村に着しけるが、民戸は僅に十二戸に過ぎずと云ふ。此の村の前面に當りて高さ凡そ五六丈とも覺しき雜木山あり。土人之を立島山と稱し島中最高の山なる由、此の山に登らざれば馬を見ること能はずとの事なれば、一同は勇を鼓して更らに此の山頂に登りけるが、其絶景なること言はん方なく、此處まで歩み來れる疲は、此の報酬の爲に全く打ち消されぬ。さらぬだに馬は此の山の正面にて一丁余を隔てたる處に三四頭臥し居たりしが、今予等一同の至りしにや驚きけん。俄かに起き上りて一聲高く嘶くよと見ゑしが、彼處此處に臥し居たる四五十頭の馬は突然起き上り群をなして四方に走り回り慣れし事とて巧みに峻坂を上下する樣は、曲馬を見るに異ならず、殊に一頭の悍馬が嵋々たる岩角に立ち鬆々たる鬣尾を北風に吹かれつゝ大海に向つて數聲高く嘶きたる狀は、實に奇代の奇觀にして最と凄くも又勇ましかりし。聞く處によれば、近來此の馬の繁殖に就きて望を屬し居るものも少なからざる由。其方法にして宜きを得ば、必ず收むる處多かるべく、獨り本島の利のみにあらざるべし。茲に又此の馬の移殖したる由來なりとて島人等の口碑に存する一場の奇談あり、そを何といふに。其昔し源廷尉(義經)二三の從者と共に蝦島に至らんとするの途次、偶ま岩船郡の海岸を過ぎけるに、亂岩の凸凹甚しきが爲め、騎馬もて通ずる能はず、去りとて馬さへ伴ふに術なければ、詮方なく馬を下りけるが、日頃愛し來れる名馬なるに、今百姓共の手に得させ空しく馱馬となさしむるも本意なきものから、馬首を北にし、生死は汝の勝手に

せよと、携ふる處の弓もて馬を打ちけれど、馬は高く躍つて海に入り、勇ましくも波を蹴て遙かの沖へ進み行けり、廷尉主從は之れを見て覺えず笑坪に入り、影見へぬまで目送せしが、やがて馬は遙かの島に着せしとればしけれど、主從は其まゝ立ち去れりとぞ。是れ即ち此の島に馬の移殖せし始めにして是より此處を馬下（粟生島と對岸三里）と稱し。十余の民戸ありと云ふ。（此の事は岡干仭氏が海府紀行中に詳なりしと覺ゆ）事固より信を措くに足らずと雖も、奇談なれば聞くがまに〳〵併せ記しぬ。

玆に又此の山（立島山）を十間程斜めに受けて、海面を拔く二丈余周圍は凡そ十二三間もあらむかと覺ばしき圓錐形の岩あり。土人之を呼んで鷗岩と云ふ、（本名蝦夷）無慮幾千の鷗常に此の岩に群集するを以てなり。春夏の交多く放卵す。蓋し此の卵は、雞卵の二倍大なるが上にも價亦廉なれど、（一箇六七厘）割烹に用ひて頗ぶる利益あるが故に、其需用極めて多く、年々競賣の額は五十圓以上に達すと云ふ。聞く、近年大いに放卵の數を減じたりと。蓋し是れ濫採の結果のみ、若し夫れ此の比例を以て年々歳々濫採し、濫採の結果として年々減じ行かば、五年若くは七年の後、些の得る處なきに至るべし。凡そ何れの地を問はず、其地の特産物ほど大切なるものあらざれど、少くも保存の策は立てざるべからず。思ふに粟生島鷗卵の如きは、特産中の特産なれど、今日に於て其保維策を講ずるは、極めて肝要のことなるべし。左れど、今より數年間は堅く其採卵を禁じ、數年後に至らば、宜しく隔年に競賣に附すべし。是れ實に簡易の事にして庶幾くは永遠に保維するを得んか。

試みに砂礫樣のものを取りて此の岩に亂投すれば、無慮數千の鷗屑々群をなし、空を掠めて一處に同翔す。愈投じて愈奇なり。實に奇の極と謂ふべし此處にて一同は小憩し、携へ來りし村酒を酌み初めしが渇きし餘數升の酒も、見るたゝ間もなく飲みほせしは、餘りに興なきわざなりし、斯くて一同はそこはかとなく、さすらひ歩るき、十二分の觀と歡とを貪り、相携へて歸宿せしは、恰も六時近き頃なりき。

（以下次號）

奇習（二）　西海坊

その二

だいこく（太黒）

大晦日の夜のことなり。太黒天は七福神の一柱にて、その像を見れば、いかにも福の神にたがはざるがごとし。その太黒天の何神なるか、又如何なる故に七福神中にかすまへられ玉ふかは、わのがここにかきしるすべきにあらねば省きつ。

身投、縊死、血塗れの聲は、多くこの夜に聞かるゝ社會の改新はすべてことに此日にして、一年中の殘務はこの日に仕果て、一年中の貸借はこの日にそれ／＼納むべき定なれば、貴賤老少の別なく、空には陰霧ますますたなびき、慘憺たる光景よもや（芽出度う新年は）などゝ、笑顔作るべき狀も見えざるに、夕陽は名殘の光をあはれに止めて立ちやすらへる頃より、身には襤褸の衣をまとひ、肩にはやれ袋を脊負ひたるが、手に土もて作れる太黒天五ッ六ッ入れたる重箱を持ちて（太黒樣に御祝なされ）（めでたいなお大黒う）と門に立ちて乞ふ。乞はれたる家にては、

粟餅）太黒天は由來經濟家なれど、米を食せずといふ故か）、をめぐむか、或は、太黒天と餅とを交換するもあり。又豪農家などにては、最初に乞ふものには、金四五十錢と、粟、米一二升とをめぐむものあり。されど、乞ふものにも眞の乞食あり。或は面をかくして、滑稽的に乞ふ良民あり。あるひは貧にせまれるが乞ふあり。五六年前、余が隣村にて、姿をかくしてれのか家に乞ひたれど母子供を抱きて出て來りて物を與へしをもて、（媼様孫御が大層大きうなられましたなー）といひけれど、母なる人は、己が子の姿を隱して來れるとは夢にも知らで（今歳三ッだよ）といひたりとの笑話あり。こは大概十時頃までのものにて、豊年のとしなどにはうるさきほどなり。

さて太黒天を餅とかへたる家にては、神棚及なげしなどにおきて齋ひ奉れど、代々火災及水難を蒙らざる家にては、その數の多きをほこりて、繁昌を祝する位なり。

その三

正月の餅

關東わたりにては、總て切り餅にて、丸餅は神棚などに供ふるもの丶外なき様なれど、九州わたりは總て丸餅なり。切餅は供餅を切る故に餘儀なく作るものにて、成るべくは丸餅なり。殊に正月三日間は角餅を食せざるほどなり。そは、正月は歳の始月の始にして、物事總て圓滿を貴び、圭角のなき様にとの意にて、且は切るが斬るとの同音を忌みてなりと老人は唱へ居れり。果して然るや、又他に因あるにや。

（以下次號）

清少納言の頓才

蓬生屋女史

清少納言の才のいみじかりし事は、今更に云ふを待たざれど、中納言隆家の卿が、よき扇を得玉ひて、之を皇后の宮に奉らんとて、あるときもて上り、宮に向はせ玉ひて、此頃、隆家、いみじき扇の骨を得て候へど、ふさはしき紙をはりて奉らんと思ひ候へど、あまりに骨めでたくて、さて、中々に之に似あひたりとればしき紙見あたらず候へど、ひたすらに求め侍るなりと啓さるゝに、さるは、如何やうなる骨にかあると、皇后定子の君の問はせ玉ふに、されどにて候、誠にいみじう、更に世にまだ見し事の候はぬ骨にて候と隆家卿いとほこりかに言高く答へ奉るに、かの清少納言、御傍に侍りけるが、それは扇のにはあらで、海月のなりと聞えけりとぞ、

くらげと云ふは、海にある生きものにて、形盆の如く、また少しく塩尻にも似たるものにて、全身骨なく、すきとほりて、海の上に浮びたるさまは、さながら月のうつりたるに似て、海月とさへかけるものなりけり。

みつわさす八十路あまりの老の波
　くらげの骨にあひにけるかな

など、むかし増賀上人も歌ひて、いり豆に花の咲くなど云ふ諺の如くに、此骨をめづらしき事に云ひなしたり。されど、隆家卿の、よになき骨なりと啓したりしを、直ちに此物を思ひ出でゝ、此處に速に云ひたる、げに、その扇の骨よりも、くらげの骨よりも世にめづらしき清女の頓才にてこそ。

また五月の　始めつ方、月なく暗き夜の事なりき、



殿上人等、壽殿のをまへの竹ををりて、歌よまんと云ひかへりしが、同じくば、后宮の御方へまゐりて、女房など呼び出でゝよませんなど示しあはせ、人々して、女房や候ひ玉ふか、女房や候ひ玉ふかと聲々に呼はり來りけるに、后の宮、きゝつけ玉ひて、例ならず呼ぶは誰れぞや、何事か出で來ると問はせ玉ふに、少納言つと起つて、みす近う出で、こは誰ぞ、さやうにおどろ〳〵しくさわぎきつるはと問へど、殿上人等は返事もせず、清女が起ちたるみすをもたげて、呉竹の枝をそよろとさし入れしに、少納言思はず、おい此君にこそと云ひけりとかや。

これ、昔、晋の國の王子猷と云ふもの、空宅の中に寄居し、竹を植ゑて大に樂し

み、つねに嘯詠して曰く、何可一日無此君。と云ひしより竹の事を此君と稱せりとぞ。されど、朗詠集にも、晋騎兵參軍王子猷、種竹而稱此君とあり。されど、清女、誰ぞと問ひしに、答へなく呉竹をさし入れしを見しより、れい此君なりしよと速に云ひなせるは、誠におどろくべきの機智にして、またその多識のほど感ずるにあまりあり。

朴平（第二十三）

白魚女史

母ときけど、己れよりもとく迎へまゐらせし百代の心なれど、此頃のさまを、そのあたり見そなはさど、母さまの如何に悲しう思し召されむ。若し妾をおもふ一筋に、あまりなりなど文雄樣に恨み聞え玉はゞ、人はいよ／＼はしたなき母子とおとしはて玉はん。

嗚呼何とせむ、一厨文雄さまの御心、母さまに聞えて今しばらく都に出でさせ玉ふを、見合はせ玉ふやうものし告げむか、いな、／＼、さりては中々に妾が氣遣ひて、御旅立ちを急ぎ玉はむ。かく、互みに、浪風あらだて、むかしよりの縁、全く絶つやうの事あらば、後の世のたのみもはてゝ、悲しき事の限りなり。如何にせん、如何にせましとぞかゝりに、思案も究まれど、そゞろに此の世もきはまりてにや、

蓮葉のつゆに心をすましなむ
後の世のみはあはれとも見よ

必ず文雄さま、後の世は急ぎ侍らず、潔やう心をすまし侍らむに、百歳を終へ玉はゞ、必ず御傍におかし給へかしとて、父にうけし短刀、そつと懐にさし入れて、そのまゝ佛間に至り、なほ涙ながらに、か

きならす鈴の音もそゞろにうちしめりぬ。

朴平も、昨日今日は思案にくれて、籠りがちなりけるが、例の心を勵まし、庭に下りたちて、慰めんよすがにもと思ふ折りから、百代が鳴らすりんの音のそゞろに身にしみ、消えかへりて、しばらくは花の木影にぬれまどへり。折節、東風あらく、花の梢を吹きまきて、冷やかならねど、まがふ吹雪の、ばつと朴平の面に散りかゝりぬ。朴平面をうたれしむかりに、つめ心を起てゝ、やゝ、孃さま、雪、雪、大雪、出でゝ見そなはせ。お若くてありながら、晝間のかんきんなどは、すさまじう候。あな、珍らし、菫が、如何して此處ら庭に、孃樣、千金を朴平に賜はれなど、おもしろげに誘ひ立つる朴平のこゝろは如何に苦しからむ。

あれはさに、思ふものをうちすてゝいなむ、如何に歎かんとおもへど、いよ〳〵湧きかへる涙を、せきとめ、〳〵、百代も少しく椽に出でながむれど、朴平いよ〳〵面白げに、これ見そなはせ、朴平、今の間に雪達摩造りて候とて、花の降り積りたる丸き松をゆびさしぬ。流石百代もほゝ笑みて、めづらしや、朴平のだるまには、足が見ゆるはと云ふに、こは仕損じたり。朴平かくてはちよんまげ剃らではなど興がるも時の間、春雨も降らぬに、二人はいつしか、そゞろに袂をしぼりぬ。

折りから、玉章の便りに、朴平披き見て、二日の暇を請ひ、出で行かむとするは何處ぞ、百代が心、知るや、知らずや、例の嫗に片時はなれぬやう、よく〳〵たのみきこゑて、急ぎ出で行きけり。

あとに、百代は、よき折りから、今こそ死なんものと思へど、母と朴平との歎き、今更にこゝろに移り

てかなしきを、かくてはいつ果てらるべき。大方に惜しまるゝ花さへ、わゝは散り行くものを、いとはれはてし身の、何を惜しむ心ぞ。かやうにいさぎよからねどこそ、人にれとしめらるゝなりと思ひ決め、傍去らぬ老婢に、家の事はひとりにてせむに、かまはじ、家に歸りてよと云へど、さりても、朴平どのが、娘さまは御病氣、殊にれひとり淋びしう思ぼし入り玉ふやうの事わりてはど、固くたのまれ參らしたるに、別に用もなき婢なれどとて、歸らむとせざるに、百代、たよりわろしとは思へど、強ひて云はゞ、疑ひを引きれこすもと、其内には折りもわらむと思へど、よく〳〵云ひつけられしものにや、何時も概ね折りは、同じ部屋にも居らざりしかど、今日は、いぬるにさへ隙をかし玉へなど云ひ、厠にとて起てど、燭をとてつき來るに、百代が今こそと思ふ

こゝろも妨げられぬ。妨げらるゝまゝに、また母の歎きのうつり來て、惜しからぬ命惜しまれ、咪さへ都に來らずむ、さむかり今日明日にと死を急がでもあらむに、如何にかこしらへて、旅立を進ふさせ參らさんなど果敢なく思ひつゞけ、

先日の御文に、近々に都に上らるゝよし思ひがけずうれしう飛びたち候へど、此の頃は東京は天然痘しきりに流行いたし、種痘せし者さへとりかゝるもの多きよし、されど二郎を伴れ玉はむ事は今少し御見合せの方よろしかるべしと存じらし

と書きしが、何故にか、ひき裂きてまたわつと泣き仆れたり。





山家夏　近衛忠熙

山さとも夏きになけりはなは根に
とりはふるすに歸りてぞゆく

杜新樹　東久世通禧

神かきの杜のしめなはみえぬまで
きゝの若葉のしげるころかな

曉梅雨　鍋島直大

わかつきのねざめにきけむ梅雨は
昨日のれとにかはらざりけり

路卯花　高崎正風

中々にゆくひとれはしうのはなの
ゆきに野路のうづもれしより

湊川懷古　松浦詮

きた風のふきゝわらしけんみなと川
今もかなしきなみのれとかな

林新樹　竹屋光昭

松のみのはやしとみしを夏くれは
わか葉のきゝもあらはれに見

夜卯花　前田利鬯

はひりにもせとにも咲ける卯の花に
暗の夜しらぬわかすまひかな

橘薫風　宮地嚴夫

いつこより吹くる風かなつかしく
はなたちばなの花の香ぞする

曙橘　阪正臣

さやかにも花たち花のかをりきて
庭まだくらしあけぼのゝそら

夏月　岩崎勝従

山川のあさせのさゝれさやかにも
すゝしき月のてりわたりたる

夜琴聲　諏訪忠元

たをやめの心をこめてひくならん
しらべたへなる夜半の妻こと

熱海にて　大畑弘國

なみよするあたみの磯のつぶら石
まるきこゝろの人もあらぬに

なつの夜　三浦千春

高どのに涼みするだにあつき夜を
いかでかしづか蚊遣たくらむ

夏夜雨　仝

暑き日をさへげる軒のばせを葉に
雨さく夜半ぞすゞしかりける

故宮　三輪義方

里の名にのこるむかしをしるしにて
ふりにし宮はあとかたもなし

髮長媛　佐々豊水

髮ながくたゝへさらめやまさやけき
かこの湊のそこのこゝろを

衣通姫　仝

藤原部うるはしき名をつたへけり
衣通しましゝひめのひかりは

夕花橘　足立正枝

夕ぐれの風もしめりてたちばなの
にほひや雨にならんとすらん

郭公　酒井喜雄

なれになくものとなりたる郭公
いよいよ聲のめずらしきかな

紙魚　仝

我がかきし書にもしみの住むをみて
老にしとしのほどぞしらるゝ

義家勿來關のかた　木庭芳香

ちる花の中をこゑ行くことのはの
なこそせきぢに猶とゞめけれ

野寺歸僧　安齋篤敬

黑染のころものいろにくれにけり
かへる野寺のいりあひのかね

關雲　澤田德平

足柄やとざしはてたるうきくもは
關のむかしのなごりなるらん

田上螢　蜂須賀隨子

小山田のみしめにつたふさみだれの
しづくと見えてとぶほたる哉

曉旅行　鍋島榮子

あかつきを待かねてゆく旅路かな
今日はみやこの山やみゆると

樹陰水　前田朗子

みつえさす靑葉のかげにうなひ子が
水あそびするなつはきにけり

谷新樹　柳原愛子

さしかはす木々の若葉の陰しげみ
晝もをぐらきたにのしたみち

夕郭公　小池道子

むらからすねぐらさだめし山松の
上にひとこゑなくほとゝぎす

螢　大内河みね子

軒ちかくとぶかとみれどふく風に
ほたるのかげの遠ざかりぬる

庭卯花　日野西廣子

夕月よさすかげくらきにはの面に
しろく匂ふはうつきなりけり

待郭公　高崎竹子

の卯はなのさきそめしより郭公
いとゞはつ音の待れけるかな

夏露　原田蒼生子

たきわまる草のは末の白つゆや
もゆる螢のいのちなるらん

夕立　鶴久子

ゆうだちの雨やどりせし木の本に
今宵のつきのかげもまたまし

月下卯花　安東菊子

あまりにもさやかにてらす月影に
面はゆげなる姫卯つきかな

蠶養婦　仝

國の富つくるこかひはたをやめも
をのこに業をゆづらざりけり

待花　柴田節榮子

しらくもにあらぬ心もいつしかと
はなまつ山にかゝるころかな

土佐日記燈序　高崎正風

歌はいつはりがたきものにて、いかに丈たかからむ

とかまへてよみなすとも、その人がらのさしもなきは、かざりたるあと、おのづからみゆべし。また、いかにつゝみくらまさむとすとも、心のひかりは、必ことものにはひにあらはれなむ。されど、人のよめる歌をよく見、よく味はゝむには、たとへ懐をのべたるならずとも、そのよみびとのいかなる人なるかは、おほよそ、うかゝひしることを得べし。予、紀の大人の歌をみることに、かのなえしばみにし奈良の末の弊をきよく洗ひのぞき、ひとつの新なるすがたをたてそめて、しかも高きしらべ雅びたるおもむきを備へられたるをめでずといふことなし。はやくおもひけるやう、このぬしは、たゞに、歌のみたへなりしにはあらじ、その人がらや、かならず心たかく、智ふかく、世をうれへ、國をおもふこともまめやかなりし大人ならむと。桂園翁の土佐日記創見をひもどくに及びて、かつ〳〵わがおもふむねとうちあへるをよろこびしに、今、又この燈をよみて、ます〳〵さきのおもひやりのあだならざりしを信じぬ。そも〳〵この書あらはしゝ、富士谷御杖翁の篤學博識なりしことは、世の人みな忘れゝどいはず、あさもよし、紀のおく山の、たにのとがけのをぐらきくま〳〵までも、ついまつのあかきともし火ふりてらして、さやけく人にみせしめられしいさをは、高しともたかし、さるを著者なくなりて後は、やむことなきあたりのみ藏のうちにおかれて、山ふみする人のたよりともならざりしに、翁の子元廣ぬし、はやくとり出きたりとて、予にみせられけれど、ぬしにすゝめ、この書の名にちなみある國光社のちからをかりて、世に公にせさすることゝはなりぬ。こをかの創見とくらべは、つらゆきぬしの世にすぐれ

たる人なりしこともよく志らるへく、またその歌のひてたるは、人がらの志からしめしことさへもよくこゝろえらるべくなむ。

江刺垣久が七十の賀の歌集の序

本居豊穎

老人の齢をことほぐと、からやまとの歌よみて、いはひもてはやすならひは、むかしよりそのあともすくなからず、したしき友どちの中にては、げにさるべきことなるを、近き年ごろ、あるは六十あるは七十の賀すとて、遠き近き國のへだてなく、疎き親き人のけぢめをいはず、ひたふるに、ほぎ歌の數の多からむをたけき事のやうに、かたみに競ひ爭ひて請ひ集むるさまなるこそいとも心得ね、さるは官位たかき人、また世にその名聞えたる人などの爲には、志るもしらぬもことほきよするよしもありなむ。そも、なほ、しひてこひすゝむべきことにもあらじを、ましてたゞ人の上にては、心すべき事とやいはん、梢の舎のあるじ恒久の老翁が、七十の齢をことほぎたくれる歌どもは、其數はいと多からねど、みなつれにしたゝめる人のかぎりなれど、前にいへるたぐひにはあらず、かくてことし七十一となれるも、なほ、いとすくよかなれど、そのまな子、また教をうけたる人たち、上野の櫻雲臺にあるじまうけして、宴なもなしたるあまりに、ほぎうたどもしるしあつめて一巻となしたれど、このはしに一言をと、その人々のこへるに、老翁は、その名の如く、恒に久しくあひしれる中なれど、家の名の、えさしはなたずて、ただことながらかくなむ。

越前國堅達山に遊ぶ

師岡素鷺子

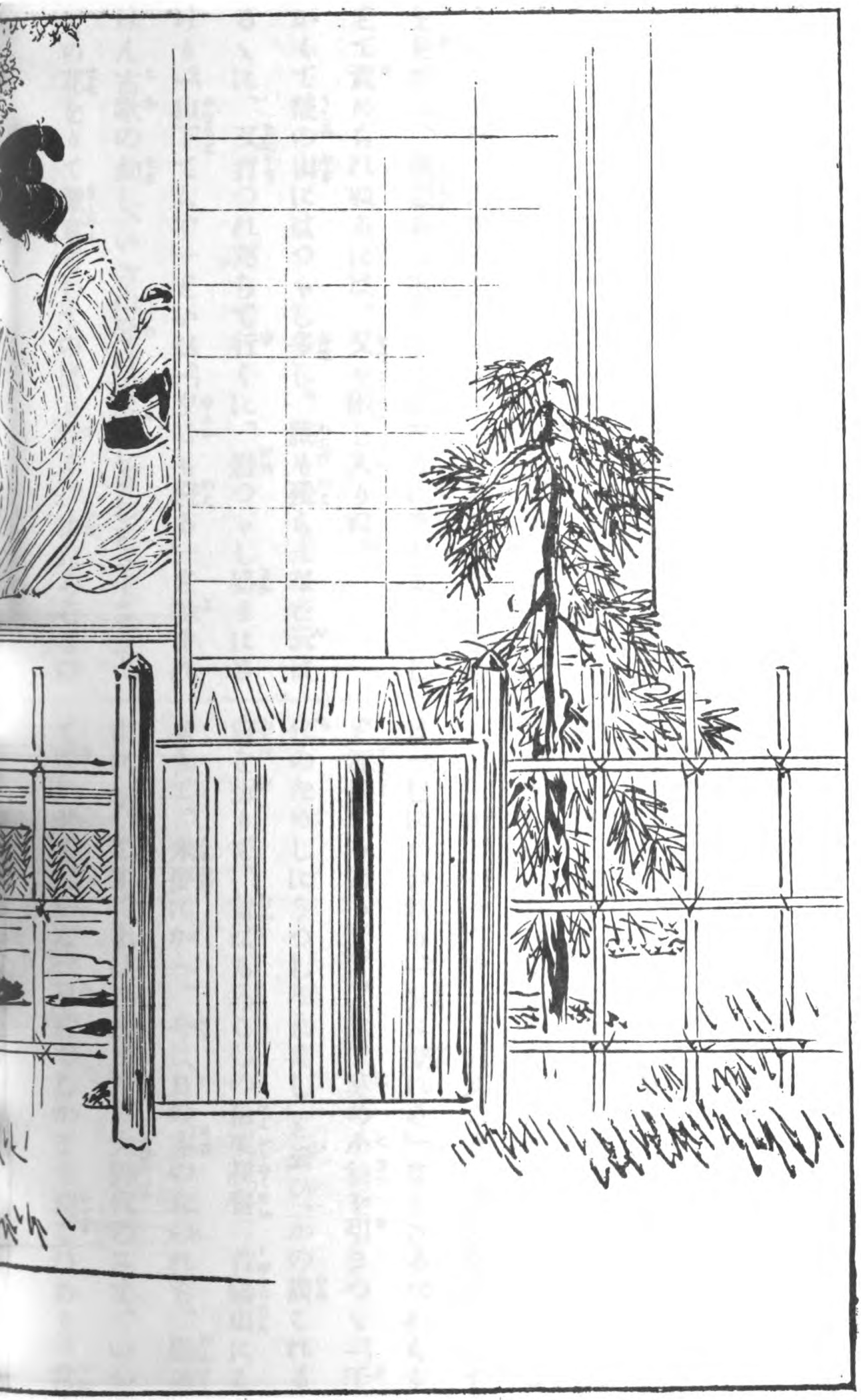
五月の末つかた、この校一同、吉田郡堅達山に遊びぬ。朝まだきより空いとよくはれたり、嬉しと思ふに、例の時よりは早くあつまり來て、待ち居るさま、まづ樂しげなり。「世の中は心々と思ひしに花にはたがふ人なかりけり」と詠める歌も「あろふにたがふ」ともあらためましやなど獨思ふほどに、七時になりぬ。校長をはじめ、一同うちつれて立ちいでつ。漸々市中をはなれて、田の面に出づるほど、左右の麥生のいとよく實りて、青々たる、延々と山の裾野につらなれる菜種の實りたる、はた大根の花の咲きのこれるなど、都にのみありし身にはめづらしきに、田の中に馬を入れて、其が後に、鍬、又は鋤樣のものつけて、田のうねをならして、幾度も〳〵、立かへりかへし居れる、かた〳〵には、泥田の中にそばち入りて、鍬もてならし居たる、實に「みなはぬひぢもかきたれて」とはかゝることにやあらん。粒々皆辛苦といふことも、いよ〳〵思ひしられぬ。わはれこのさまを、たゞ驕りに耆れる人々に見せまほしと云へど、友の、例の感慨また始まりぬ、今日は遊ふべき日なり、よく勤めよく遊ぶとは云はずや、よくなげき、よくよろこべ、と云はるゝに、とゞめ難きは心ぞかしなど語らひつゝ行く。苗代といふなる稲の若苗も、未だそのまゝなり、今年は此地の氣候少しおくれたれど、今七八日の後に植ゑ付はすゝなりとぞ。いとはそう青々と生ひ茂れるさま、宛、緑子の産毛といふらん樣して、いと〳〵秋の實のたのもしや。なほ道すから、人々と物がたりつゝ行くに、大方は、此の縣のひと〳〵なれど、おのれのふは斯

るところ始めてなれど、ことに珍らしく、丸山の何處より見ても丸き、平岡山の鐘樓、苗代水の蛙の聲、はた田螺の音、とり〳〵にをかしとて打興ずれど、さらで、こゝなる麥の穗先の、あるとなきとあり、いづれか大麥いづれか小麥ぞを區別せよと云ふは、植物科受持の友なり。種油の花と、辛子菜の花とは、何によりて分つべきかと問ふは、家事科擔任の者なり。其他、糯と粳とは刈獲上いかゞなど、さま〴〵の問題いでぬ。其を課せられて答ふるはおのれ一人の任なり、あはれ今日は生徒になりぬるよ。この生徒、都の市中のうまれなるからに、麥は標本として枯れたるをのみ見、油も辛子も、全くなれるをのみ目なれ、粳糯の収獲法も、親しく知らざるからに、其の答案、いと〳〵難かりき。言ひあつれど、いとしたり顏に、鼻高きこと麥の穗先にもまさり、誤まりて笑はるれど、辛子菜のからき面色するも、をかしく、おもしろし。或は賤が垣根の卯花になづさびては、名物の雪の殘るかと疑がひ、沼にさける燕子花を見ては、先つ年、兩姫宮殿下にめされし折、この花の御池に咲き匂ひたりしなど思ひいでつゝ行くほどに、かなたの山に、生徒多くつどひて、とく〳〵と打まねきぬ。嬉しさに足も空に走り登れりしなるべし。此處までは、殆二里もあらんといふに、時みれは九時二十分なりき。

こゝよりは、又、一同おもひ〳〵に、彼方此に散りばひ遊びぬ。此山三峰ありて、二峯は一面に柴のみ生ひて、異木草なし。はる〳〵と見渡さるゝ四方のけしき、目もはる〳〵なり綠色こき夏山の梢、霞も霧も隔てなきながめは、雲とまがひし春にもまさりて、いと可笑きに、先に見つゝ來しにやあらん、

麥生の吹く風に打なびく穂浪は、かの昔、武藏野の「尾花靡よる」といひしにもまさりぬべし、菫つみ、茅ぬきつゝたのしむ生徒等を見ては、又、都の人の大方字の上書のものとのみ思へるが多かるにぞひとりこたれぬ。すべて、文にまれ歌にまれ、畫にまれ、たゞ想像標本のみにては、いかていみじきものやいで來べき、實景實情を知りて後にこそ風韻あり感情あるものは、出來るなれと云へど、さらぞこの實景を見たり、風韻ある歌文なり畫なり出來たまふへしとて責められぬるには、又々困じ入りぬ。

かくて後の山にはつゞし多し、蕨も殘らんなど云はるゝに、又打つれだちて行くに、岩つゞし盛りにさけり。「山下てらす」といひ。「夕日も殘る」と詠まれけん古歌の如し、いざ山分け衣のしるしとせよとて、この花をりて徽章としてのぼり行く、山たちぞなの實の赤き、萩の若葉の打そよぐ、異木草の新綠なる、いと／＼をかしきに、たゞ蕨のひろごりて、長う出でたるのみぞ「雉なく岡の小松の下わらび折のこされて春たけにけり」とうとましうなむ。いよ／＼のぼりいよ／＼分け行くに、「新綠したゝるが如し堅達の山」と云ふあれど「足曳の堅達山はさかしけど君とのぼれどさかしくもあらず」と云ふあり。否、「樂しくもあるか」とせよと云ふあり。君と登れどにては一巳にかきれり「共に登れど」ならざるべからずと添削すりあり。あるは、二葉の小松を引きつゝ「千代のためしにうつしうゑまし」と云ひ、かの廣これる蕨を折りて、昔はもろこしの伯夷叔齊、首陽山にこもりて、米麥にかへ、今は日の本のれのれら、堅達山に弄とす、あはれめでたき大御代のさま、いかて聞かせてしかな、見せてしかなと獨ごつあり。常





はまして言ひ出てつべき事ならねとも、何れも〳〵睦しく、心隔てぬ女同士なれど、思ふまゝをえはゞからず語らひぬるも、又、うれしく面白さまさるわざなりかし。

いつしか正午になりぬ。一同を集めて晝飯の支度せさせ毛氈しきて割籠取出させつ、殊更に樂しげなるも、處がらなれどなりけり。なほ一同に菓子など頒ち與へられて、飽かず打遊びつゝ、「あなたのし今日の樂しさ古もかくやありけん今日のたのしさ」など催馬樂のかへうた歌ひなどする内に、時來ぬれど又始の如く打そろへ、引つれつゝ此處を出てつ、梢の松風、山の躑躅、かへりみがちなるに、彼の麥生の穗波にぞ心は打寄せらるゝばかりになん。道すがら風涼しく、暑からず心地よし。三時三十分許りかへりつきて、各家路へとたちわかれぬ。

まだしらぬ都の人に見せてしが
　つどなすみれのさきのこる山

夏山の青葉がもとを分け入れど
　春のこすゑは思はざりけり

早苗とる頃ともならば又も來む
　都の友に見てかたるべく

げに〳〵今日ばかり遊び興じぬる日はまたなかりきと、誰も〳〵、云ふもまたをかしくてなむ。



雜報

●京都御所昨今の御模様　京都御所にては、過日來御道具類、其他の御物を御取調あらせられしが、此程に至り全く結了し、兩陛下並びに　皇太子殿下に屬する御文庫を、夫々御區分あらせられ、御札を貼附して御藏に納めさせられたりと。又過日烏丸通七條角田中某より、多くの押畫を天覽に供したるが、此中、十二月景色の押畫帖を御買上あり、尙寺町松原下る木村某より、糸製の女持草鞄、卓子掛、机着並に靴下等を御買上げありしと承る。又京都在住の華族よりは　兩陛下の御慰に供せん爲め、何か献上せんと、此程華族會館分局に集り種々相談の上、時節柄花菖蒲を献納する事に決し、上京區兩替町二條上る藥駝師上坂某へ調進方を命じ、八十餘種を取集させたるが、献納の上は御所御池の汀に植ゑつけさせられん筈にて、尙華族一同より　皇后陛下へ、別に花菖蒲の鉢植を献上したりと云ふ。

又土方宮内大臣は叡旨を奉じて、引續き御陵の巡拜を爲し、此程より山城乙訓郡樫原の古墳を視、夫より淳和天皇御火葬所、桓武天皇皇后、平城嵯峨兩天皇御母藤原氏乙牟漏高畠陵、海印寺村　土御門院天皇金原陵等を巡拜したりといふ。

●御船調進の事　天皇陛下には、かねて御舟遊の

事をればしいだされしにより、御舟の雛形を、さきに、小島佐兵衛に命じてたてまつらしめ、侍從職に於て種々考案中の處、其後桓武天皇遷都の節、御舟御用として隨ひ來りし某の末孫、上京區東川通小川東へ入条太三郎といふ者に就き、御舟の舊記を調べたる上、用材は尾州產檜とし、板の厚さ一寸三分舟の長さ三間半幅四尺四寸深さ一尺二寸となし、（家形無し）周圍に金字菊唐草の模樣を付することゝなり。今廿日頃迄に調進すべき旨、右太三郎へ仰せ渡されたりといふ。

●離宮にて茶菓を賜ふ　天皇陛下の御思召に依り、去七日午前十一時三十分より、淸浦司法大臣を始め、目下上京中なる各地方の控訴院長、地方裁判所長、及び檢事正等を濱離宮に招き、田中宮內次官、岩倉爵位局長の兩氏接待主となりて茶菓を賜はりたり當日各賓は　兩陛下の御肖像を拜して、天恩の優渥なるを感謝し奉りたり。平生なれど御陪食を仰付らるゝ筈なるが、宮中喪の上、京都御駐輦の御事とて、斯くは茶菓を賜ひたる次第なりとぞ。尙去八日同時刻より、矢張、田中、岩倉の兩氏接待主となり、濱離宮に於て、樺山內務大臣を始め上京中の各地方長官に茶菓を賜はりたり。

●女王御降誕幷御命名式　閑院宮載仁親王殿下には、去月二十九日を以て女王御誕生あらせ玉ひし處、本月五日午前、御命名の御式を行はせ玉ひたり。尤も宮中喪なるを以て、單に御略式に止させ玉ひしが、女王の御名　茂子と名けさせ玉へり。當日各皇族方及び御母君なる智惠子殿下の御生家たる三條公美公、幷に故梨堂公の後室治子の方も參殿ありたりと承る。竹の園生のいや榮えに榮えますこそ、賴もし

とも芽目たけれ。

●桓武天皇御陵私考　桓武天皇の御陵は、近年に至りて伏見桃山に御治定あらせられ、既に修築の工事も竣功したることとなるが、茲に土佐の人にて目下京都木屋町三條上る處に僑居せる小松盛政といへる人は、小松内大臣重盛の子資盛の後胤なるよしにて、其家に傳はれる系譜に據れば、平氏の鼻祖とあふぎ奉つる桓武天皇の御陵は、洛西樫原の内川岡村なるべしとあるより、種々の書籍を調査したる處、追々其確證を得たる由にて、過日來京都滯在中なる宮内省の吏員を訪ひ、之を談じたるが、戸田諸陵頭は、爲に去る四月廿一日、一應其地を撿視し、藤田諸陵助も頃日同地に赴き實地を視察したりといふ。

●臺灣の女子教育　臺灣國語學校第一附屬學校に女子部を設け、去月廿六日土人女子四十八人に入學を許し、授業を開始せり。學科は修身國語習字造花編物裁縫及び唱歌にして、生徒年齡平均十五歳九分、最長廿九年二ヶ月最少六年一ヶ月なり。

●新田義貞公の墳墓　越前國吉田郡牧の島村なる藤島神社は、人も知れる如く、新田義貞公の靈を祀れる所にして、現に別格官幣社に列せられ居るが、同所は燈明寺畷とて、公が逆賊の亂箭に斃れたる地にして、公の墳墓は同國坂井郡長崎村長林山往生院稱念寺に在り、碑面には源光院殿正四位上行前左近衛中將新田大守義貞覺阿彌陀佛と記しある由なるが、公戰沒の日は曆應元年閏七月二日なるを以て、古來より命日には法會を營み來り、維新後は太陽曆に換算し、八月廿九日を以て忌日と定め、藤島神社の例祭も其日を以て行はるゝ事となりしといふ。又墓碑の傍なる小堂には、公の肖像を安置しあ

り、堂の傍には、本多修理恒久の建てし碑石あり（享保七年建設）其れに並びて脇屋義助の石碑をも存し居る由にて、明治十五年九月二日、正一位を贈られたる節、勅使特に此寺の墓前に參向して　贈位の宣旨を傳へられ、位記の御文は奉告の式終ると共に藤島神社の神官之を奉戴して直ちに之を神社に藏めたりといふ。尙同寺には德川吉宗より福井藩主に由緖を尋ねたる時の舊記を始め考證となるべき數通の古文書を藏し居る由なり。

又藤島神社は、何か事情ありて現在の場所へ建設せられしも、參詣人等往々傍なる齋藤六郎の古城趾と取違へる事あり、之に反し長崎村の方は、前記の如く義貞公の墳墓に相違なきに、今や附近の地所は追々民有に歸し、周圍は畑となり、幾年の後は墳墓の跡をも見るべからざるに至るや圖り難しとて、大に憤慨し居る者もある由なりといふ。

●豐太閤墳墓の石材　山城阿彌陀峯に建設せんとする豐太閤墳墓の石材は、豐國會の伊東技師及安田技手が備中の北木島及伊豫の大島へ出張して斫り取りたる由なるが、北木島に於ける石材の內墓表材寳珠臺石二個、並に蓮臺等は近々に京都へ着すべき筈なる由、又笠石及丸石も不日到着の筈なる由にて、大角石（墓表臺）は四回迄切り損じ、五回目の分を實査したる所是又た不充分なりしに付き、隈なく島內を取調べたる所、千の浦と稱する所に於て恰好の石を發見したるに付、早速之を切り取り、去十三四日頃迄に荒造りをなすの運びに至りたりと。又小材の分（玉垣等）其他八分通りは、既に到着の由にて目下同島に殘れる分は花瓶の胴及香爐の臺等なりとぞ。



六月廿日兼題　夏懐舊

天　三河國寳飯郡下地町　永井さい子

若竹のしけるを見てもうきふしを　重ね來し身のむかしをそれもふ

地　東京麹町區平河町五丁目　織田きみ子

しけりあふなつ野の草の露ふめば　消えにし友のしのばるゝかな

人　東京下谷區仲徒歩町　佳山蝶子

なき人のかたみとなりて匂ひけり　ともにめでにしとこなつの花

秀逸（二十首）

五月雨のふるにつけてもなき母の　ありし昔をかけぬ日ぞなき　富士村蝶子

ながめやる影はむかしに變らねど　なみだにくもる夏の夜のつき　仁保基子

五月雨にもの思ふ宿をのきばにて　むかししのぶの草ぞ生ひそふ　木川里子

なき人のむかし語りにかきくらし　そでもかわかぬ五月雨のころ　名取正代子

さらぬだにむかしをしのぶこの夕　ほとゝぎすさへなき渡るかな　春永きみ子

なき人を偲しのべとやさらぬだに　つゆけき袖にさみだれのふる　田代蝶子

立花のかげたちならしほとゝぎす　なれもむかしのかけしたふらん　佐々小琴子

共に見しあふちの花は咲きぬれど　むかしの友ぞあふよしのなき　江口とみの子

軒ちかき花たちはなのかをちらすは　須磨春根子
かくはむかしの戀しからじを

もろともに涼みし友のゑのはれて　香川　頴子
いやなつかしき森のしたかげ

あはれ〳〵なれもむかしを思ふらん　土肥　仙子
ふる五月雨になくほとゝぎす

なき友のうつしゑ見ては思ふかな　石川すけ子
共にすゞみしゆふくれのそら

香をとめし花たちばなの匂ふにも　三谷起美子
いとゞむかしの人ぞこひしき

なき人のありしむかしを思ふかな　小森さた子
花たちばなのかをるゆふべは

うつき花誰に見よとやさきにけん　日高かず子
今はうゑにしひともなきよに

過ぎゆきしむかし思へは夏ながら　降田　楨子
袂につゆそおきまさりける

時鳥なくこゑきけばさみだれの　彦坂　尊子
ふりしむかしの忍ばるゝかな

朝な〳〵手むくるいけのはなはちす　矢野うめ子
ともに見しよの忍ばるゝかな

つゆしげき夏の野原をすぎくれは　戸塚　鐵子
しのぶの草にむかしおもはゆ

五月雨よいたくなふりぞ更ぬだに　岸田はつ子
むかししのべる草のいほりに

（以下原稿到着順）

山をぬくちからも春のはなとすぎ　山口やす子
蟬のこゑきくなつぞものうき

いにしへにかはらぬ夏の月見れは　長山　孝子
はかなくなりし君ぞかなしき

せめてもとかた見にのこすなつ衣　田中ゑん子
ほすよりも先ぬるゝそてかな

夏くさにおく露よりもまさりけり　美奈井芳子
過ぎしむかしをおもふなみだは

夏ことに過ぎにしきみの忍ばれて　中山とみ子
つきも涙のたねとなりけり

ほとゝぎす思ひ出よとなかねとも　徳永萬壽子
なほ忍ばるゝ去年の夕ぐれ

ぬぎかふるけふの衣にたらちねの　星野　弌子
うつゝ香深くなほ殘るなり

もろ共に涼みしうてなけふ訪へは　星野　仁子

わるしかはりし跡そはかなき

橘の香もなつかしやふるさとの　星野康世子
こひしき人のそてと見えつゝ

暑さをもうちわすれつゝ思ふかな　失名
花にくるひしはるのこゝろを

君か植えし軒のたちはな香るなり　坂田きみ子
むかしを忍ふよすかとをせん

夏木立しげきおもひのしらつゆは　壺井美幾子
むかしをしのぶ涙なりけり

いたつらに置きにし春の惜まて　山田璋子
ぬきすてかたきはなころも哉

去年のけふ螢狩りしてあそびしを　田代綾子
おもへは更にかなしかりけり

世の中のこゝろのまゝになるならむ　清島治子
いまひとたひの春となしてむ

なにことを見るにつけても夏木立　國廣きさ子
しけくむかしの忍はるゝかな

夏艸のあを野かはらにおくつゆは　佐々有隣子
むかし志のふのなみたなり鳧

日盛のあつさにこりてみそきかは　松浦よし子
なかるゝ夏もをしまさりけり

霞たつころとおもへははやくれて　春野梅子
あつさ身にしむ夏は來にけり

なつの夜は空にほのめく月みても　錦織さち子
昔こひしきこゝち こそすれ

端居して月にむかしのかつ／＼を　三島みき子
まつしのはるゝなつのよは哉

やみのよを照すほたるに思ふかな　下田ひろ子
むかしの人のふみをよみしを

なつこたちかけにあそびし昔も　佐々木つね子
思ひたさるゝきのふけふかな

世にはたゝ名のみにほひて立花の　近藤ふく子
はなとちりにし人そかなしき

しのぶ草みるにつけても思ふかな　西艶子
ふりし昔のことのかず／＼

夏なからかすむ月かなたゝひとり　河田いし子
風まつよひにむかししのへた

つく／＼と昔をしのぶなつのよに　河田ふく子
いかにきけとかなくほとゝぎす

夏すらにかくはむかしの悲しきを　住吉すみ子

秋としならはなにこゝろせむ

去年のけふならしのをかに時鳥　綿野りき子
はつこゑきゝし事をしそ思ふ

時鳥鳴くこゑきけむしかすかに　福原　菫子
むかしの夏もしのはるゝかな

もろともにすゝみしやまの岩清水　失　名
くめはさしくむわか涙かな

五月雨にふりぬるむかし忍ふらん　山本　常子
過れは來なくやまほとゝぎす

いにし世をしのびて來なく時鳥　山本のぶ子
鳴くもかなしき去年のふる聲

こひちかふ螢のかけもあはれなり　久間　春子
笹もて追ひしむかしおもへは

なき人のかた身の影そしのはるゝ　竹村竹里子
若葉つゆけきそのゝこだちに

ひたすらに袖のみぬれて五月雨の　磯野たま子
ふりし昔のしのはるゝかな

夏草のよし志けるともさみだれの　磯野いと子
ふりし昔のをしへわするな

幾度かふりみふらずみさみたれに　磯野こと子
いとゝむかしの志のはるゝ哉

五月雨にのきのたちはな匂ひ來て　山田小金子
ふりしむかしのしのはるゝ哉

櫻はなめてつるはるのゆめさめて　春野よし枝子
青葉のかせのなつかしきかな

はれまなき五月の雨にいにしへを　植木　鋼子
しのふの草そいとゝたひそふ

郭公ふりにしひとをしのひ出てゝ　岩本とく子
卯のはな山のあめに鳴くなり

折りとりて車にさしゝあまの川の　下元茂登子
ふることしのひめつるうの花

たち花をなにおもひけむよの中に　上原のふ子
むかしならざる物なかりけり

今もなほ花たちはなのかけゆけは　野中あさ子
むかしゝのぶの露ぞこぼるゝ

共にきゝしそのよをしのふ夕くれに　宮地　琴子
あはれをそへてほとゝきす鳴

五月雨のふりしむかしを忍ふよに　上野　君子
あはれをそふるほとゝきす哉

さみたれのふりしその世を今更に　白石　海子

おもひいでつゝぬらす袖かな

夏の夜をてらすほたるの影見ても　阿部　好子
むかしこひしきふでの友かな

若葉より洩るゝ月をはなかめても　阿部　満子
鳥も寝ぬ夜のおもはれにけり

五月雨に軒のしつくを見るさへも　深津　峯子
ふりしむかしのなみたなり鳬

諸共にきゝにしむかししのばれて　下村さだ子
いやなつかしき山ほとゝきす

無き跡をしのぶの岡のほとゝぎす　大渓しげ子
思ひあまりてもらすひとこゑ

小夜更てむかし思へはなつながら　小西　琴子
なみだはこりて石となるらん

目にさいる青葉の露もむかしをぞ　小西　清子
したふなみたの玉と見るらん

夏木立しけるわか葉を見るなへに　小西　鎮子
すぎしむかしの忍ばるゝかな

ひく牛もわらへもあへて今日ぞ猶　得田　仲子
のどけきころの戀しかりける

郭公なく音かなしくきこゆなり　植木とよ子
失せにし友をおもひ出つれは

夏の夜に月にむかひてかなしくも　植木はな子
わかなき友を思ひ出つるかな

みしかよに思ひいてゝはなき友の　石川とく子
うつしゑ見つゝこひ慕ふなり

いにしへはいかに暑さを厭ひけむ　萩原　章子
いまは我身のおきところなき

手をとりて夕すゞみせし限かはに　櫛田よし子
ことしはひとり影うつすかな

あれはてしむくらかやとの橘は　高島　壽子
誰かうゑおきしかたみなる蘭

つちもさく夏の暑さもふりし世を　服部かつみ子
しのふなみたは乾かさりけり

あさ毎に庭の小くさにおくつゆは　北村左枝子
むかしを忍ふなみたなるらん

すきしよを夢ちにたとるまよ中に　北村　孝子
何處ともなく鳴くほとゝきす

なきひとをしのふ心をくみてにや　森　雪子
聲もあはれにほとゝきすなく

いたつらにむかしを忍ふ夕まくれ　森　圖子

雲路はるかになくほとゝきす

五月雨のふる日あまたになりぬれは　玉井　孝子
かへらぬ人のわすられぬかな

去年しめしたにの下庵夏のきて　牧山きよ子
又結ひ直さるゝころとなり鬼

いにしへを思ひ出れはひとしほに　伊藤　清子
涼しさまさるあつてはりかな

夏のひにかわかぬまても袖ぬれぬ　尾立　富子
こそのけふをし忍ふなみたは

夕立にまたもそてをぞぬらすなる　小杉　浪子
ころのけふをし忍ふ身なれは

梅雨のふりしむかしやしたふらむ　大竹　治子
しのひねになく山ほとゝきす

ほとゝぎすこそに變らぬ聲聞けは　兼子織部子
過きにし人そいとゝこひしき

たらちねの庭の教へをよそにして　石川　類子
くるふこてふにむかしをそ思ふ

夏のきて木々は若葉のいろますに　仝　樂子
我のみなとてふりまさるらん

庭の面ははなたちはなの香りつゝ　仝　久子

むかしを忍ふなつはきにけり

夏草のしけみかもとのなてしこを　水野　清子
あはれとみしも昔なりけり

思ひいてゝむかしこひしき此頃を　南野　越子
かこち顔にもなくほとゝきす

いにしへを忍ふの山のしのひねに　北川はな子
さよふけてなくほとゝきす哉

思ふどち布の籠さけてかはのへに　仁保志摩子
ほたる狩せしこともありしを

文机によりてむかしを玄のふかな　武政常盤子
をしへの君のあつきめぐみを

梅雨のそれにもましてふるものは　林　常子
昔をこふるなみだなりけり

へたてなくうき嬉しきを別ちにし　島田　悦子
なき友こふるみしかよのつき

去年まではともに螢をあつめしを　失　名
今はいつこにゆきをつむらん

露しげき夏野のくさをわけくれは　中桐　杏子
むかし忍にそてそぬれける

いにしへをしのふ涙のむらさめに　小倉根玄ら子

ほとゝぎすさへ鳴きわたる哉

なき人をしのふにぬれける露しけみ　柳田　里子
われにし宿そあはれなりける

みしか夜をおき明してもなけく哉　舘脇ます子
露と消えたるひとをしたひて

五月雨にぬるゝ袂はいにしへを　池谷　富子
思ひいてたるなみたなりけり

五月雨にふりにし世さへ忍はれて　吾妻　近子
ぬるゝのちなる袖のうへかな

五月雨のふるにつけても戀しきは　諸井久良子
むかしかたりとなりし君かな

かへりこぬむかし忍へは夏の夜の　伊藤美代子
短かきゆめもむすむさりけり

（以下延着）

なきちゝのあはれと聞きし時鳥　飯塚むつ子
もの思へとやいまはなくらん

いたつらにさりにし夏の忍はれて　水上　仲子
今は世になきともしたふかな

諸共にすゝみしひとは世にあらて　水上千代子
ひとりさひしき夏は來にけり

去年の夏うせにしひとの袖の香を　日吉あさ子

思へはかなしのきのたちはな

なき人と共に待ちにしほとゝきす　日吉かつ子
こそのまゝなる聲そかなしき

過し世をしのふか岡のゆふすゝみ　春日井清子
月やむかしのあるしなるらめ

花ゆゑに厭ひしものをいつよりか　矢島えい子
そよく若葉のたとのすゝしき

こしかたのうきもつらきも短夜の　山水つゆ子
夢めよりけにもはかなかり鳧

花鳥にあそひすき來しとしつきを　西元　豐子
たもへはをしきなつの暮かな

打つれてともに涼みし木の下に　中澤千野子
ひとりむかしをしのふけふ哉

まと近くほたる飛ひかふ夏のよは　廣田すへ子
むかし學ひしひとをこそ思へ

たち花のまくらにかをる夏の夜は　廣田とめ子
むかし忍ひてねられさりけり

蚊遣火のいふせきあつさ其かみは　香留部とも子
扇きうてなにしらて過きしを

六月廿日兼題　朝顔

天　大阪市東區横堀二丁目百三十九番邸　岸田はつ子

しのゝめならで、見るよしもなき朝顔なれど、露より先にと、おきいづるに、花なきをりも、かくあらむやとぞおもはるゝ、さて朝戸あくる間も心元なく、庭におりたちてみれど、朝風わたる青葉の上には、露の白玉やどりもあへず、はら〳〵とこぼるゝもとに、今さきいでたる花の千種に匂ひたる、わざとされはし立てしにはあらぬものから、目もさむる心地して、賤が垣根の物としも、思はれぬに、日さしかゝれど、やがてしぼみぬるは、いとも〳〵あかぬ心地ぞせらるゝ、されど、朝な朝なにさきかへて、さかり久しき花にしあなれど、露のひぬまの盛なるが、なか〳〵にあはれなるや。

露をのみはかなきものと思ひしに
日影をしらぬ花もありけり

地　但馬國城崎郡豊岡本町市川方　西川順子

今年は、例よりも朝顔のよく育ちて、花の色のとり〳〵なるが、露を含みて朝風にそよけるさま、いと心地よきに、母君と共に、庭に下りたちつゝ、ふと見出さど、殊に勝れたる花の、生ひ繁る葉に掩はれて、たゞには見えぬがありぬ、さらぬだに朝日待つ間の命なるを、かく美しく咲き出でながら、人にも知られず、やがて空しくしぼみはてなんよ、あはれ人の世にも、かゝる此ひや多からましと、口惜しく覺ゆるまゝを、聞え參らするに、否とよ、げにこの花は、けふこそ人に知られざれは、やがて殘したる種子の、來ん年にはいかに麗はしう咲きいでん、徒らに只一時の盛りを競ひて、心なき稚兒の手に採みとられ、あるは惡きたねを殘しなどしたらんには、いと淺間しき限りなりかし。汝もよく〳〵心して、花の心をゆめなわすれぞと、さとし玉へる言の葉は心にしみて、今までのわが心、やさしう思ふものから、猶しも心ゆかで。

さらぬだにつゆの命を葉がくれに
咲けるもあはれあさがほのはな

など、口すさむもわりなしや、

人　甲府市山田町　名取正代子

四季折々に、咲く花は、くさ〳〵あめれど、朝がほ

むかりいさぎよくめでたきはあらじかし、夕べ〳〵明日さかむ花のつぼみの、ほのかに色みせて、さて朝な〳〵に色あらためつゝ、日影と共に匂ひそめ、露のひるまもまたず打しぼみて、長きさかえをむさぼらざるは、げに武士の大和心にもたとへつべく、たをやめの操正しきにもくらべつべし、まして朝霧のむら〳〵とはれわたるほどに、おきいでゝながむれど、朝ごとのよき目ざまし草ともなり、且はおのづから、あさいする身の怠りをもいさめつべし、されどたゞに、うるはしき色香をめでて、目をなぐさむるのみにはあらで、なか〳〵に、心までもはげまさるゝは、いとも〳〵うれしきかぎりになん。

（以下原稿到着後）

東野けい子

さし昇る朝日のかげのきらめきて、いとゆかしう、春の花にもをさ〳〵劣らず見ゆる朝がほの、清く玉なす露重げに咲き出でたる、いと目あたらしう、心地涼しくぞ覺ゆる、朝な〳〵咲きかへて、盛り久しき花を、開くる間咲きてなど、むかしの人の常なき世にもなづらふるが、いと心くるしうなむ。

佐々有鄰子

朝顔は朝な朝なに咲さかへてと、むかしの人のうたひけんことのは、うべなりけりな。敷妙の枝ゆする鷄の八聲に夢さめて、學の窓おしあくれど、みつよつふたつはやくもさきいでぬ、あなうれしと立ちよれど、おきそふ露の紫ふかくにほへるも、をりからいとをかしうおもしろけれど、

朝顔はわれよりさきにさきいでて
つまくれなゐの花ぞにほへる

と、反古のはしに書きつるを、いつのまに女の童がとりけん、聲たからかにうたふをきけど、妾が腰折になんありける、世にもれつることの口惜しや。

木川里子

空蟬の世のたのみがたきをしめす、盛短き朝顔こそ、いとはかなけれ、されど東の山の端やうやう白みゆくしののめ、物の色ほのかにみえそむるころ、白き、赤き、あるは紫、とりどりひもときて、庭のませ垣をうづめ、まだ消えやらぬ有明月に、おきあまる露の光をやどしたるけしきの艶なるは、たぐうべくもなし。かくをかしき朝な朝なは、日頃はなれ

かたきなどやが下のむしふすま、とく起き出て、今は朝いもなし得ず、清き風に袂をふかせ、身もすこやかになりゆくは、みな此花のたまものぞかし。さるにても、見ずぞなかなか有るべかりけるといひけん人は、いともうたてきことになん。

秋園秋子

朝ごとに、咲きかへて、面白く、まがきに、あまる朝顔の、人の朝いを、いましめかほなるも、いとをかし、昨日夕つ方より、明日を樂しみにし朝顔の、今朝見れど、いふばかりなう、愛らしう咲き出でゝ、蔓の長くたれしに、花の露重げなる色、中々にめづらしう、「地につくことを浮雲がり」のすさみを、思ひ出で、いと床しく、ながめらる、まことや、去年の此の頃、あづまの都にて、入谷を尋ねし時の事にも思ひ出でゝは慥いかにめでたかるらん片山里の、とりつくろはね、垣根すら、あしたには、心地すが〳〵しう、なり行くをと、彼方の空のみ、いとなづかしう、なん。

秋園つゆ子

花といへど、いづれ嬉しからぬはあらねど、やさしくも、また、果敢なげなるは、朝ごとに、色めづらかなる、朝がほなりや。夕のほどに、明日咲くべき、つぼみの、やゝとけて、やがて短かき夏の夜の明けぬれど、れのかしゝ、咲きにほひたる、いとめでたし。旭のみる〳〵、高く昇れど、あわれ淋しく、萎む花の、名殘もとめで、吹く風に、散り果てぬ、あゝ思へど、果敢なき、浮世かな、花のみか、人のいのちも、かぞかり、甲斐なきものにやと、そゞろに物の悲しうてなむ。

錦織幸子

朝な〳〵、露たもしき、夏草は、いづれめでたからぬはあらねど、色も香も、優にやさしき、朝顔こそ、またなく、床しかりけれ、朝露の、ひら〳〵と、晴れ渡る、庭のまがきに、うすくこく、咲きゝほひて。涼しうそよぐ、風に亂れちる露の白玉、その干ぬ間ぞ、仲々のながめなる、げにいのち短かき、花とし いへど、朝ごとに、色あらためて、咲きつゝ、清らかに、匂ふ様の、いかにもあかぬ、心地のせられてなむ、

あさごとに色あたらしきあさがほは

いかなる露のへだてなるらん

佐々木常子

朝顔は、つるをもてる、草花の一つにして、夏のもなか頃、やう／＼生ひ茂りて、わしのまがきに、つるのたよりわりげに、はひからまりて、こ紫、淺黄、白、あるは、しぼりなど、いろ／＼うちまじり、朝日の出でぬまに、露のたまをおきながら咲きたるは、何にたとへんものもなく、見るものをして心をとゞめさせざるはなし、されど、朝日の山の端はなれて、やう／＼と日影のさしのぼるに及び、つゆよりもろくしぼみて、見所もなくなるものなり、げに朝顔と名をおひたるも、しかることわりに基けるになむ。

江口とみの子

夜半の暑さたへがたく、おくるを待ちて疾く起きいづれど、朝風清き庭のさまもいと涼しく、かき根の朝がほのさきそめたるは、目もさむるばかりなり、この花は、朝な／＼咲きかへては、かなしとなに立つほどよりは、なか／＼に盛り久しき心地ぞする。をしむ心も玄らで、とくしぼみゆくは、わびしけれど、夕へになれば、明日咲かんつぼみの、なつかしうけしきぞむも、いぎたなきねむりさまして、起き出てん友となりて樂し。

白井となみ子

春秋の折々につけて咲く花は、いづれも皆自然の美をそなへざるものなけれども、見る人の心々にて、或は菊をめで、或は蓮をめで、梅をめづるなど、とり／＼なり。世の中に、花はさま／＼多けれど、殊に人のあはれを引くは、朝顔にしくものやなからん、玄のゝめのまがきに、こぼるゝばかりの露をふくみて、しげる葉かげにやさしく見ゆる花の姿も、日影まつ間の程と思へど、ことに花にゝずあはれも深く覺ゆ。されど、むかし加賀の千代女が、たゞ一本の此花ゆゑに、つるべを用ふるに忍びずして、もらひ水せし事など、やさしくて心あらん人はまことにさも覺ねぬべし、我身の此花をめづることは、朝毎に露とゝもに咲き出でゝ、日かげをまちて、また露とゝもにしぼむ樣の、まことに世の榮え衰ふる理を日毎に見る心地して、實にみじかき露の命をあはれと思ふなり、されど、此朝顔にしてもしことに花となしきものな

らむ、心ことにあはれと思はん人もあるまじを、其名にたがはざるにぞ、まことに人のあはれを引く故ならめ。

白井　とま子

一日去りがたき事ありて、郊外の一村まで行かんと、朝まだきより出にけり、いつしか市外に出づれば、人家まばらに、四方の景色いと物しづかなり、東西の田甫はてなう青み渡り、朝露のきらゝかに草上に置ける様など、得もいはれず、徜行きかふ人もなき家路を、獨りすゝみ行くに、側にいと田舍びたるあら家ありき、かりそめに結ひめぐらせし透垣に、白紅紫などの朝顔、まさかりにさけりければ、あまりの美しさに、我を忘れてたゞずめり、垣根の下に、あるは頂に、あるは他樹の枝に、已がまに〳〵まつはれる様、なか〳〵他花の及ぶべきにはあらず、或人この花の日影出れば、たゞちに凋むを見て、はかなきものに云ひなせしが、已はひねもす咲き居たらんよりは、朝げ清けき中に咲き揃ひ、いたづらに戀々と人目を引くをのみ欲せざるがたとき様ぞ慕しきげに物の美は只一隅にのみとゞまるものにはあらず四季折々の美花を取りあつめたる某の公園、某の庭内、美は美なれど人作のすぐれたりしならめ、のきかたおきししづか家に、天然の美はあるものよ、あはれ造化の美こそ眞理の美なるものなれなど、思ひつゞくる中、はや日影もはなやかに、蝉を出し小鳥の音のさわがしきに驚かされ、志す地に急ぎ行きしこそをかしかりき。

河田　いし子

人つてにのみきゝつる入谷の里の朝顔、ことしはと思ひ、滕りときゝしかど、しのゝめつくるとりの聲をきゝて、宅をいづれば、しらみゆく空に、あさ風のそよ〳〵とはだりて、涼しさいはんかたなく心よく。足のはこびもはやし。ゆきつきて見れど、我より先に、れなし心に多人數つどひきて賑はしう、家毎にかざりたてたる花の色にはいふもさらにて、葉なども綴れるもあり、いつれれとらぬ花香にさきいて、露を帶びたるさま、けにきゝしにまさるふせい、いはんかたなし。あれもよしこれもゆかし、そもうつくし、かれもうるはしど、めもあやに、ゆきつかへりつたちさりかね、そのうちの五鉢ぞかりわしたさ

かんつぼみあまたあるを知りて、家づとにあかなひかへり、それよりは朝毎に咲きいつる花みんと、たれもくきそひてとくれき出て、あさいするものもなう、我のみか人の心もきよらかにうるはしう咲く朝顔の花と共に、すがくしう樂しくてなん。

丸田　ゐい子

曉の鐘に起きいでゝ、朝がほの花見ありかんと、そこはかとなく行く道のへの賤か伏屋をのぞき見れば、靑葉のみ茂りあひて、見ところもなき庭に、なつかしき花の、いとあやしき竹垣に、れもひのまゝにはひひろごりて、朝露れもげに、いろくはかなげに咲けるは、ひとあはれなり。朝日花やかにさし出でたるに、れく露のかゝやきて、一しほの色を添へたり、我が花園にさきぬる物よりは、こよなうめにつきてうつくし。

内田　菊子

「朝がほはあさなく咲きかへて盛り久しき花にぞありける」と、なにがし天皇のよませ給ひけん、げにうべなりや、あはれにはかなきが上に、樂しみ多く、且色のめづらかなる、此花になんありける。春の花の如く、ひとつ色もて重く咲くにはあらで、あさなくく色あらためて、さきにほひ、日かげをまちてうつろひはつるは、なかくにあかぬ心地のせらる、まして此頃は、かきねの竹に、はひまつはれる、朝がほの、明日咲かん、花のつぼみを、かぞへつゝ、水打ちそゝぎ、などして、まちわつる、朝げに、きよらなる露をふくみて、すがすがしう咲きわたりたる、いはんかたなく、心地よけれど、いぎたなき朝いの床も、おのづから、とくれきいづるやうなりにたり、されどあさいする身の、いさめ草と、さる人のいへるも、げにことわりになん。

福原　萩子

あはれにいとゞ、めでたきは、垣根に咲ける、朝顔になんありける、色も赤白紫など、いろく、うすくこく、いと美しく、いぎたなき身を、笑ふが如く、咲きそむるさまの、面白きに、置きそはりたる露の、折々、そよとの風に、はらくと、こぼれ落つるさまなど、すがくしきこと限りなく、目も、さめなんばかりなり、されど、露のひぬまでかりの盛なるこそ、いとあかぬ心地のすれど、異草の如く、一も

色もて長く咲くものならで、朝なく〳〵、紐ときかふるものなれど、中々に、たのしくてなん。

吉村ふて子

待ちわたりし時鳥の、暁がたになきそめたるに、いとうれしくて、庭におりたちて、などりなつかしうそゞろありきしつゝあれど、まがきにかゝるあさがほの、春の頃よりつちかひしゝるし見えて、あかつきつゆをおびてとく咲きいでたるは、かの「さふらひわらはの指貫のすそ露げに、花の中にまじりてをりてまゐるほど、えにかゝまほしげなり」と、かゝれたるさまもおもひいでられて、いとをかし。

須磨春根子

とかく朝いかちなるものから、朝顔の花さく頃はとく起き出づることをかしけれ、まして初めて咲きたる時などは又一しほなり、打水などして、涼しき夕まぐれ、庭の面など、そこはかとなくありくに、垣根にはひまつはれるか、つぼみのやゝ長くなりて色づきたる、一つ二つ葉かげにさし出でたるに、なほ隠れたるもやあらん、と求めつゝ、明日の朝は咲くならむなど、いとなつかし、かくて、下に待ちつゝ、ふしどに入れど、斯かる折りは、短き夏の夜もいと長き心地せられて、いくたびとなく目さむるものなり。ねやの戸のひまよりさし入る光りに、嬉しくも明けにけるかな、と思ひて、起き出たるに、あらず、月かげのいと清う、澄み渡りたるなりけり、さては心からまがひけむ、と、いと口をし、されど、東の山の端にたなびく横雲の、いと静かに、立ちわかれゆくなるは、明け方近きにやあらむ、やがて明けはなるゝけしきも見むやと、庭の面のあなたこなたさまよひつゝ、かの垣根によりて見るに、はやほころひそめたるに、露さへおきて、いたう涼しきに、さと吹き渡りたる朝風に、白玉の散り亂るゝなど、いとあたらしく、いはむかたなく、目さむる心地す、かくて、ほのほのとしらみて、山松の數よむばかりなりゆくに、有明の月かけ光おさまりて、あたり少しをぐらくなりしやうなれど、かへりてしげみの奥など、さたかに見ゆるやうなるは、さすかに月は明きやうなれど、かひなきものなり、あはれ、このけちめのほどはかり、うかしきはあらし、いへどもいはれず、かけども書けず、たとへむものもなし、か

ゝるうちに、はや大かたひらきて、朱をうはふとかやいふなる、紫の色こき、白くへりとりたらむやうなる、はたさもあらぬ、あるは白き赤きなど、今日はしめて、咲きたるなれは、花の數もいと少く、形もちひさく、あるはこちこちしくをかしけなるも、ましりたれど、なかなかにいとようさきそろひたる頃よりも、をかしうあはれにこそ。

久間春子

簾まきあけて、風まちつくる夕ぐれ、友の君のもとより、母君とみの事にて、只今の汽車にて、さるかたへものせられしを、父君もおはせぬほどなれど、いと〳〵さう〳〵し、いづこかさしてとの言の葉、まことにれはし待らむ、玉のうてなも同じことゝおほして、いかでわたらせたまひたらむや、など、こまご〳〵といひおこせ給ひけるを、母とじの君にも見せまゐらせしに、いかにわびしう待ちゐたまふらむ、とく〳〵との給ふまゝ、女のわらは一人具して、近きわたりなれど、いそぎゆきつゝみるに、君は待ちつけ給ひて、いとうれしさのあまりにや、何くれともてなし給ふを、さては中垣をすゑたらむやならるをとて、へだてぬ友なれど、互にされあひつゝ、涼しきかたに、女鑑など讀みて遊びすぐすほどに、短夜のはや更けわたりてや、寺々の鐘の音も、さすがにはたへにとほす心地せらるゝに、うすもののてふなど、はりたり、いざたまへ、とはりてふもかけたれど、大君きませ、などうたひ給ふもいとをかし、やがてねやに入れども、所かはりしてとゝて、ゆめまどろまれず、いと〳〵くるしう、夜のあけむを待ちつけ、雨戸一ひら開きて、見渡すに、朝霧たちこめ、いと〳〵たど〳〵しきに、やをら庭に下りたちそこはかと、露けき柴草ふみしだきつゝ、ありくに、築山の麓に、さかつきといふもののみたちむやうなる花の、あまた、白く、あかく、るり色、あるはむらさきなど、いろ〳〵に咲き出でたるか、池にうつりて、粧ひかほなる、いひしらすか〳〵し、これこそ、日頃鼻高く、學校にての玉ふ心つくしの朝顔ならめ、宵に見たりし女鑑の兼題もこれなりなど、思ふをりから、後よりはれまも待たぬけしきにて、花に心をと、驚かし給ふに、あないつの間にか、起き出で給ひけむ、さるはさきつ方は、空寐し

居給ひしな、明けぬとて上のきぬかいやるも知らぬさまに、たはせしはど、少し怨するに、かなたはいよ〳〵腹たゝしげに、露よりさきにかへらせ玉ひしはうらめしう思ひてなむ、など、の玉ふもをかし、はしためか手水などもて來るに、君と共に口そゝぎ終りて、やがて姿なども、つくろひて、人の名どり庭の名どりも、をしけれど、又のちに學校にてと契りつゝ、さらむとたち出づるを、しむしとむかり、とめ給ふ袖にまつはれがゝる花の露、いとゆかしうて、折らですぎうきけさの朝良、と、しのびていふを、君は心ゑて、一ふさ折りて給ふもうれしうて、東髮のねもとにさして、この花のしはまぬうちに、わひまゐらせむとて、

いくたびかゝへり見しはや朝顔の露のひぬまをちぎりたけども

春野よしゑ子

明の鴉に夢さめぬ、椽の戸あけて、朝風にびんの毛なふらせつ、垣の方見やれど、今朝はいくたの色をましぬ、紅、白、紫、濃紫、柿しはりなどに咲き出て、露重げにうなだれし樣、畫に繪にもとめかたく、

たらうたしともうらうたし、さはらは折れんよしの枝を頼みに、朝ごとにはゝゑむさへめでたきを、ましで露のひぬまのさかりときけど、いとゝあはれに思はれて、

はかなしやまたき露さへきえぬまにしはみそめたる垣の朝顔

植木鋼子

まはらなるやれ垣をたはひて、つるをかしう、はひろこりたる朝顔の、清き白露を葉末に結び、曙しつかに、咲き出でて、あさいの人をいさめ顔なる、あはれにもいとけたかし。かくて、朝な〳〵花の數も添はり色もうつくしう、さま〴〵に咲き替へて、秋の末、初霜置くころまで、盛り久しくみゆめれど、昨日みし花の、今朝はなく、けささきいづるも、日影やう〳〵、さしのぼるころほひには、とく露に先立ちて、はかなくしぼみ果てぬるさま、まことに、世の人の、時のまに、さかえおとろへ、處をかへて移り替り行くも、まのあたりしのばれてなん。

得田仲子

きさらぎのうめ、やよひのさくら、いづれめでたか

らぬは、なけれども、わきて、はかなくあはれなるがうへに、ゆかしきものは、朝がほにこそありけれ、あかつきふかく置く露は如何にわけてか、そひるらん、うすくこく、さま〴〵に咲きにほひたる、花のをかしさ、いとあかぬ心地するものを、日さしのぼれど、やう〳〵しぼみて、やがて露と共に、ちりうせぬるこそ、なか〳〵にめでたさのまさりて、いと〳〵をしきかぎりにこそ、ゆふべになりぬれど、わすさきぬべきつぼみを數へつゝ、水打ちそゝぎなどして、まち居つるほどに、あくれど、花のさかりのすぎもせんかと、まだきより起き出れど、しのゝめのうす雲ならで、さきかへたる、色のうるはしさ、目さむるばかりなり、されどにや、あさいする身のいさめぐさと、ざる人のいひけるも、げに、ことわりになん。

戸塚鐵子

なく鳥の聲にねさめて窓れしやりつゝながむれど一むら竹の若葉しげりあひたるが、露にぬれて、みどりいやませるもをかしさまなり、わけてやれ垣をたよりに今咲きいでたるあさがほのすがたの、やさしさも、種々なる色なるも、花の去年より大きやかなるも、うれしく賤がはらはぬ庭も、今朝はおとなう見はをありて、都にはぢぬ心地せられぬ、程なくしぼみゆくは惜しけれど、又夕暮に明日咲かんつぼみかぞふもおもしろく、かゝる人はなれたる山住も中々にわびしからず、朝な〳〵ねざめのうれしうこなん。

服部かつみ子

朝いする子いさめ草と、何れの母かゆひけん竹のまがきのふしのまを、千代とたのみてはひまつはれる朝がほの、紅白あるは紫と、花のいろ〳〵咲みだれたるこそ優にうるはしく床しく目さむるばかりになるをやう〳〵日たけぬれど、次第にしぼみて、ねく露と共に散り行く樣、いとあはれにあかぬ心地ぞする、されど夕べとなれど、またあす咲き出でんつぼみの、早やふくらかに氣色ばみゐるこそいと嬉しけれ、かくてくる日の朝な〳〵、ひもときかねて、咲けども咲けどもつきせぬ此花こそ世の人は露のひぬ間の命とてはかなきものゝうちに數ふれど、我は小々に盛り久しき花とみて、めでなんかし。

降田槇子

朝な〳〵に、咲きかへて、見れどもあかぬ朝顔や其色と云ひ、其形といひ、げに美しく愛たき花にこそ、頃は夏のまさかりにて、前栽の草木は、皆青葉のみいや繁りゆきて、見どころもなきに、ひとり此花の、かきにはひまつはりたるが、さま〳〵の色に咲き出でたる、目もさむる心地ぞする、ことに露にぬれたるさま、いとあはれにめでたし、また小さき鉢などに、植ゑられたるが、さながら笑みの眉うちひろげたる、らうたしとも、らうたし、やがて晝近うなれど、其まゝしぼみゆく、盛りの短きは、あかぬ心地すめれど、色香のあするまで、ちるを知らで殘り居たらんよりは、なか〳〵にめでたく、まいて次の朝は、またさらに新しきが、あまた咲き出るこそ、げにゝるものもなく、をかしけれ。

三谷きみ子

朝まだきHの光りも未だ出でざるに、露にきらめきて、つや〳〵と咲き出でたる朝顔の花こそ、いとめでたきものなれ。さるは、夕ぐれ毎につぼみを結びて、晝の暑さに勞れ果てし人をなぐさめ、朝な〳〵ありあけの月の光りと共にさき出でゝ、いぎたなき人の眠りをさますめり。あはれ一ひらの花の恵み、また大ならずや。まして葉にれく露と共に、いさぎよくとくしぼみて、うき世の夢に迷へる人の心をいさめがほなる。げに限りなき花の徳にこそ。

師岡千代子

土はさけ、金はとくるといふなる夏の暑き日にも、朝な〳〵に咲きかへて盛り久しき此花よ、さるは朝日影さし出でぬ間を、おのが時と咲くなるをかしさよ。露のひぬ間に一村雨のかゝれよかしなど、風流人に賞でらるゝ、賤が垣根、蓬生の宿、露いとはて、といろ〳〵麗しく咲き、いつるは實に面白くなつかしき花なりけり。うべ、この花のさく頃は朝いする身の怠りしるくて、我ながら姿かたちも整へられぬ、物のあはれはと云ひけん秋の千種の中より、七草の數にさへ撰ばれしも、殊に目出度ことあれどなりけりと云ふ〳〵、籬の下に下りたち見て、明日咲きいでん花の數よみつゝ、これや何色、かれや何種、へりとりなど思へど、雲ながら明けぬと云ふなる短夜も、待ちわぶる心地して、いかでつとめては

負くべしやと思ふも、いと〳〵をかしく楽しかりけり。

岡田はる子

百鳥うたふ花の春は、いつしかすぎて、今ぞうす衣きる緑涼しき夏とはなりぬる、されど、時まちがほなるまがきをつとふ朝がほも、やゝほころびそめてわした〳〵とわらそひて、たをやかに咲きいづるもゆかしき限りにこそ、其色やうす紅の色はへて、紋桔梗のとり〳〵なる色は、いとみやびやかにうつくしくぞありける」あはれ、この花や、わかつきに綻びて、日かげをまたで萎るゝは、いとをしき事なり。あな高砂のちとせ松の操も、一朝の短かき壽たもつ朝がほの花も、そのほど〳〵につくす操はかはらざるらん、あはれあさがほよ、そのよはひは短くとも、其美くしきはなのいさをは、いまはのきはにあらはれてときは木の松の緑とたくらぶる其操こそ、尊かりける。

谷村とみ子

軒の松風音絶えて、うす羽装ふ虫の音さへ、いとゞ夏にくるしむ風情にて、青葉の風もなつかしう、暑さを忘るゝすべなき此日頃、楽しき花は何ならん、是ぞもろうどのもてはやす朝顔なる、此花は、朝な〳〵に露を帯びつゝ、白よ、赤よ、あるは紫よと、世の常ならぬ花を咲かせ、青葉にみだるゝゆかしさ、春の花にも勝りなん、其様は、何にたとふるものもなし、されどかゝるゆかしき花の、日の昇るにつれてしぼむは、實にかよわき事にこそ、かゝれど、古人も、此花は無事をあらはすと云へり、されど、松の緑の千年かはらぬ操も、朝顔の一朝の榮えも、各其守る所の操は一つなり、此花のはかなきも、其本分をつくせし果なれど、惜しまれつゝ散るも亦床しき花なりや。

以下延着

飯塚むつ子

何事につけても、漫歩でかり心の慰むものはあらじ、されど晝の程は、なほ暑のたへがたけれど、朝まだき露よりも疾く起き出でゝ、水の煙りと共に立ちて行くに、押しなべて霧ふかくして、遠くは森も林も、近くは家も籬も見え分かぬに、朝風さへ心ありげに袂に通ひつゝ、涼しきことなへてならず。やう〳〵空の明るうなるまゝに、何にかあらん薄赤うはのめくものあり　近う寄りて見れど、あやしき柴垣に、朝

顔の數しれずはひまつはれるなりけり、葉はしげりあひて緑ふかく、花は赤く白くはた紫に、それのかぎ〻淡く濃く咲き匂ひつゝ、露さへ置き添ひたるはとり〳〵にをかし、まだ蕾なるはよき女の童の物思ひなげなるに似、半ば開きたるはやんごとなき姫君のつゝましげなるに通ひ、はた盛りなるはさる女房の愛嬌あるにたとへつべくや。かゝるめでたき花をばなど唐人は槿花一朝榮とは云ひくだしけん、すべて花は盛りみじかきこそ哀れにはおぼゆれ、もし久しう咲けるものならば、誰かは見はやすべき。たとへば年老いて人にうとまるゝが如くなるべし、など獨言ちつゝ打守りける程に、花は皆咲き揃ひて、やをら吹く風に露さへ亂れて碎けつゝ、得も言はぬ影色なり。さてはかうやうの處にはいかなる人か住むならん、主のゆかしけれども、いと物靜かにて、遣水の音より外に人のけはひもなく、心なき賤か、と、よめりし萬代集の歌さへ思ひ出でゝいとゞ哀れは增しぬ、かくて飽かぬ心地はすれども、萎るゝまで見んよりはとて歸り來るに、霧もやう〳〵晴れ渡りて、烏は林を離れて啼きさやき、日の出るにやあらんあなたの森の陰より雲の紅う見ゆるも見捨てがたきに只だ例の柴垣のみ、隱るゝまで顧らるゝはいとあしくてかくなん。

村松みち子

うすくこくよに咲きいづる花のいろ〳〵、いづれかうつくしうめでたからぬは侍らねど、わきて朝顏てふ花は、赤の花などゝはことなりて朝な〳〵にいろめづらかに咲かへて、夕べもまたでしぼみぬれど、そのさかりは、ひさしうて、いとたのしみふかき、花にて、されど、あさいするみも、この花のさかりのころは、とくおきいでゝ、露のひぬまにとて、ながむる花のすがたは、いときよらかにて、めもさむるばかりにうるはし、されど、日たけぬれど、花ひとつだにのこさで、しぼみぬれど、あせたる花ばのこりたらんよりも、なか〳〵にあはれめでたくげに〳〵、いさぎよき花になむありける。

朝な〳〵ひもときかへてさく花は
いかなる露のなさけなるらん

矢島ねい子

さるやんごとなき方ざまより、今日はとの御消息、

しのゝめちかくまかでつるに、なりところどひいへゆきかふ人のけはひもなく、ひろびやかなる庭の、ところせきまで、あさがほの、大き小き、まじはりて、紫、紅、こくも、うすくも、つゆおもげに咲きいてたるは、から錦一面にはりつめたる樣にて、いとめてたし、まゐてあさ日のひかりにてりかへされ一きはそへぬる花のにほひは、いひしらずをかしつゝ、つゆの間とはかなみしあさかほの名をいづこにかもとめむとおもはる。

田部里子

はゝなる人、兼てより、今年はと、庭のあなたに、あやしき垣などしつらへおふしたてたまひし朝顔、いまやはひ遍でり、朝なあさな、あざやかにほころびいでゝ、濃きも薄きも打まじりたる、げにいはれぬふぜいなり。みしをりの露わすられぬと思ひいづれむ、あきはてゝ霧のまがきになぞざれたまふもをかしうこそ、此花の或人もいへる、わきてみんと思ひしほどにては、いとど日影にもろきぞ口惜しうあへなかれど、あかつきちかく、あさいはといはぬをかりにいさゝがはなる、一人ゆかしうなむ。

中川千野子

夕べよりの雨、今朝は名殘のふ晴て、朝風のとなつかしふ吹からに、前さいにおり立てど、草の葉におく露のはらはらと袖にこぼれかゝるなど、いと興あるまゝ、さりもねやらで、さすらひしに、柴の袖垣に、朝顔の花の、時をね顔に咲きいでたる、いとめづらしともうれし。

わたりは、さながら、みどりの毛せんをしきたらんようなるなかに、うすきこき紅の花の、三つ二つ露もこぼさで打ゑみしすがたの、一しほ見せねせらるゝに、心うもはれて去むしながめ居しまに、やがて朝日はなやかにさしのぼれど、ふくみし露も消ねはてゝ、さかりなりし花もしをれゆきぬ。

あはれ、かげろふの夕べをまたぬ世のならひとはいひながら、かくまでにはかなきものか、あすありと思ふ心のあだ櫻、とうたひけんも、うつせみの世のたのみなきをよみ出でしならん。げに、はかなきは日かげまつまの朝顔はものかは、やがては、たが身のうへになど思ひつゞけて、つゝみかねたる袖の露、うつろひゆく花の上にふりかゝるもろゝみはづかし

や。

廣田とめ子

堪がたき暑に、何事も打すてけれど、庭の面は夏草のみ生しげりたりけり、雨降りしあした、涼しき風の枕にかよへど、常よりとく起出て、今日なん、いぶせき草をかき拂はんと、庭にをり立ては、かき根の朝がほは、我より先に、名殘りのつゆれもげに咲出たり、げに一年のはかり事は春にあり、一日の事は朝にありとの諺を、此花は守りけり。ほのぼのと明け行庭のまがきに、ゑましう獨り咲出たるが、いとなつかしくあはれなりや。朝日の高く登れど、見るまほどなくけふの盛はすぎにけり。されど、朝いのいさめ草と人の名付しはむべなりけり。又夕さりくれど、明日咲出ん花のかすかの色さへ見せて、人の心を樂ませけり、かくて朝な〳〵赤白紫など丶新く咲きかはる日數は、久しきものを、朝顔の露の命とか露のひぬ間とか、人の世のもろきにたとへられしはいと〳〵口をしうなん。

朝な〳〵咲きかはりゆく朝がほは
人にわかれぬ心なるらん

香留部とも子

夏のみじか夜明けゆきて、起きいづるより、急がるゝは垣ほの朝がほのもとになん、若葉のいろに涼しげなるに、露いと滋うたれき渡したる、見るからに目さむる心地ぞする。もゝいろ白うすむらさき入りまじりつゝ、れのかじく色香きそひて咲き匂ひたるあてやかさ、げにいひしらずなん、夕つかた數へおきたる蕾のほかに、二つ三つ葉かくれに見いてたるこそ、思のほかにいと〳〵嬉しけれ、されど、かはかりうるはしき花も、やがて日高くなりゆくにつれ、あはれ見るかげもならしぼみはてぬる、けに〳〵はかなき極みになん。しかはあれど、敢果なきは此世のならひと開くものを、ひとり朝顔のみならんや。

黒瀬春恵子

まがきの朝がほ、今朝はきのふにもまして、いろの千ぐさにさきいでぬ、中にも雪をあざむくばかり白きが、花びらもこと〳〵にて、あさ露をれびたる風情、ねもいひしらずなん。さはいへ、このめでたき花の、いつまでかくてあるべき、あすをもましでしぼみぬるこそはかなけれ。人の一生もこのはなにつ

ゆことならず、いかにさかり久しかれと願ふもせんなし、たゞそのさかりなるときはをあやまらで、人の道を行ひ、世のわざをつとめ、年老いて後の悔いなからん樣、かまへて心すべきにこそ。

大竹治子

春のころより心しておほし立たる朝顏の、このころやうやうゑみそめぬれは、そこにも一鉢まゐらすとて、ほどちかく住み給ふをぢの君のもとより、おこせたまへるかいとうれしくて、まどの外近うすゑおき、朝夕水かひなどし養ふほどに、日にまし花のかずもそはりゆき、花ひらさへいと大きやかになりぬれは、いと／＼嬉しくて、あさな／＼またきにおきいて、そが開くさまなどみるを、こよなきたのしみとしゐたるに、いつしか我しらずあさおきのくせつてき、はては朝顏のなくなりたる後も、あさいせすなりぬることそ、かのあさかほのあさからぬをしへにて、はたをぢ君の深きめくみのつゆのたまものなりけれど、いと／＼うれしくてなむ。

あさかほの花の數にみちひかれ
花いせぬみとなりにけるかな

兼子織部子

夏草は、いとやさしくて、とりどりに見すてがたきが中に、朝顏こそ萬のあはれはまさりつらめ、小柴垣のあやしきを力となし、朝露のひぬ間を命とたのみて咲きいでたるだにあるを、朝に開きてひるまをもまたでしぼみぬるは、いとはかなしや。されど、ほのかに明けゆく空に、垣根も見わかぬばかり生ひ廣ごりたるに、色さまざまなる花の、露をおびて、夕べかぞへしよりも、いと澤に咲きいでたるこそ、をかしうもうれしけれ、されど、朝戸あくより、萬の事打忘られて、先此方に目をやりつゝ、しばし立ちも得やらで打向ひゐたるに、常々師の君の、女は朝顏の花の如くあれかしとの玉ひしをふと思ひ出て、おのれを見れど、今しもふしどはなれたるまゝのしどけなさを思ふに、暗きうちよりよそほひ美しうも咲きいでて、みだれを人に見せぬ此花の思はんことのいとはづかしきは、我身のいとよきいさめなりかし。

●餘芳

●教の庭

兼題

懸賞歌題

兼題受賞者（歌の部）

一百	木林彬香子	一百	木林英淑子
十二	植木鋼子	四	高井孟子
一	林鹿子	七	師岡須賀子
二	中村友子	二	稲田君子
十一	佐々布鄰子	二	江崎みさ子
二	稲木稲子	十二	師岡千代子
三	勝家貞子	二	廣田留子
一	松田節江子	五	松田靜江子
一	西澤みさ子	一	木下安子
三	橋本敦枝子	一	大森峰子
一	黒川むめ子	一	西澤靜春子
二	高橋政子	二	大槻季夫子

一　沖田みさを子　二　松井たまに子
一　圓司みゑ子　四　田村千代子
一　松田八重子　一　川井田さよ子
一　道簇八重子　二　南大路芳枝子
一　堀内安子　二　森田さき子
一　松田つぎ子　一　平山ゆふ子
一　雲井なほゐ子　三　南大路正子
一　飯田梅子　二　松田もと子
七　千々波楢子　一　武智卓能子
一　阿南慶子　一　富田仁蕗子
一　山田光子　二　小橋幸子
一　伊藤海子　一　羽田たか子
一　久保田律子　一　師岡清子
二　南大路業子　一　千日文子
一　横山君子　五　羽田三緒子
一　河村かれ子　三　三浦時子
二　上野緑子　一　溝口直子
一　楢崎光子　一　山本澄江子
二　石井鶴子　一　小川銀子
七　河野文子　一　本田きよ子
二　吉田芳子　一　高橋なみ子
一　工藤まさ子　四　落合操子
一　花岡むめ子　一　相羽政子
一　細野喜代子　一　黒田豊子

一　松原きよう子　一　臼井直子
一　宇野きく子　九　永井きい子
一　波多野直子　二　內藤清子
一　永島磯野子　一　平塚千代子
一　松田いし子　一　高木こう子
一　横田穀子　一　豐井蝶子
一　堀岸かと子　一　河原崎梅野子
一　德永萬壽子　一　楢爪乙女子
四　大橋てい子　一　內田愛子
一　大屋丙子　一　野尻鶴子
二　澤田春子　五　藥師寺芳子
二　大橋廣江子　一　高井米子
一　柳　しけ子　一　仁保基子
一　土生清子　二　高橋千代子
一　坂口しん子　一　大鐘きよれ子
二　横敷にか子　二　川瀬きく子
一　瀬戸ささ子　二　香川顕子
一　遊佐さよ子　一　溝口寬子
四　高野辰子　一　田邊貞子
一　木下本子　一　横山きみ子
三　千賀しけ子　三　梶井久子
一　藥師寺琴子　一　近藤仲子
一　田淵歸子　一　吾妻ちか子
一　磯部つや子　一　永井夏子

一 山本いさ子
四 林　久子
一 名取正代子
三 鈴木美惠子
一 久門利志子
二 丸山須磨子
一 遠山たゞ子
一 樋口けふ子
一 川口政子
一 牧野斈子
一 太田貞子
一 楠瀬とめ子
一 眞鍋直子
二 松原保子

（文の部）

二章 八太光子
二十二 佐々有鄰子
一 坂口しん子
三 吉田たけ子
二 碓井武子
一 羽田千世子
二 青木春子
一 香川顯子
六 降田楨子

一 安井草子
一 館脇ます子
二 荒瀬ふさ子
一 河田いし子
一 諸井久艮子
一 牧野楷子
一 曲澤ひて子
一 既受しげ子
一 岩崎今子
一 大横貞子
一 小町谷黒江子
一 佐治ふさ子
一 川田孝子

三章 岡本康子
二 岡　佐波子
十九 師岡千代子
十三 吉田芳子
一 碓井信子
二十 植木鋼子
一 樋口かれ子
十九 松田靜枝子
四 鳥山亀子

一 藤本雪子
一 橋本丹江子
一 綾木亀子
十二 櫻井久子
一 奥原ふく子
五 名取正代子
九 師岡須賀子
四 中村友子
九 諸家貞子
一 水田せき子
二 川田こう子
二 青木傑子
八 田村千代子
五 上原さみ子
一 武智卓能子
二 足利世根子
一 安藤義妙尼
三 加藤きみ子
三 土屋てい子
一 澤田せい子
一 廣田さめ子
一 宮川きよ子
一 河山いし子

二 竹内淑子
一 田邊貞子
二 城山さき子
一 落合操子
一 奥原さも子
五 太田貞子
一 保坂はま子
一 東　しめ子
三 諸家かなる子
二 山本澄江子
五 江崎みさ子
一 稲木稲子
一 松井つる子
一 沖田みさを子
一 稲岡つれ子
三 赤尾たま子
一 安藤鏡子
三 藤野たげ子
三 横山柳子
四 眞鍋直子
一 横川きみ子
一 岡　さは子
一 宇多田揚子

○插繪

●附錄



（發行日）

第壹號明治二十四年八月五日發行、第貳號より第五號まで每月一回五日發行、第六號より以降每月二回五日廿日發行、第百號明治廿八年十二月廿日發行

每月二回 三日 十八日 發刊

女子の友

都合により 初號發刊 六月二十二日

一冊金八錢 六冊（三ヶ月分）金四十六錢 十二冊（半ヶ年分）金九十錢 廿四冊（一ヶ年分）金壹圓八十錢 全國無遞送料

女子教育の聲は日をれひて高し是時に當り我が女子の友は女子敎育家庭敎育唯一の機關として將に世に生れんとす其の記事は女子の友、家庭、史談、學藝、童話、敎育、小說、漫錄、文園、雜報の十欄に分ち平易を主とし實用を旨とし本誌賛成の諸先生並に他の諸大家の執筆を煩はし女子として修むべき德、究むべき學、學ぶべき藝、知るべき事は號をれひ悉く網羅して報導することを怠らざらんとす且每號挿畫の外に本邦を始め東西洋古今の烈女賢婦を口繪に出し其の貌其の裝悉く考證を附し一見其の時代にありて其の人に接する想わらしめんとす我が女子の友の眞價如何は請ふ發行の後をまちて之を知り給ひね

●本號發刊につき特に賛成を表せられたる諸君左の如し（姓名いろは順）

女子高等師範學校教授 岩川友太郎
東京府高等女學校教諭 岩谷英太郎
高等師範學校教授 生駒萬治
華族女學校教授 坂正臣
華族女學校長 細川潤二郎
女子高等師範學校教授 大久保介壽
女子高等師範學校講師 奧好義
女子高等師範學校教授 加藤錦子
高等師範學校長 加納治五郎
高等師範學校教授 谷本富
女子高等師範學校教授 田中敬一
高等師範學校訓導 田邊友三郎
東京女學館教授 田邊わけ子
東京女學館長 辻新次
華族女學校教授 土屋弘

女子高等師範學校教授 中川謙次郎
女子高等師範學校教授 野口保興
富山縣尋常師範學校長 桑原護一
女子高等師範學校 矢田部須子
帝國圖案社主 福地復一
帝國博物館 小杉榲邨
音樂學校助教授 小山作之助
音樂學校助教授 幸田延子
女子高等師範學校教諭 後閑菊野子
女子高等師範學校訓導 合原琴子
女子高等師範學校長 秋月新太郎
華族女學校教授 淺岡一
高等師範學校講師 阿保友一郎
跡見女學校長 跡見花蹊
華族女學校教授 佐野安

女子高等師範學校教諭 佐方鎭子
文部省學校衛生主事 三島通良
女子高等師範學講校講 三輪義方
東京女學館教授 水谷直孝
東京府高等女學校教授 三輪田まさ子
女子高等師範學校教授 篠田利英
女子高等師範學校教諭 新莊義之
華族女學校學監 下田歌子
女子高等師範學校保姆 清水鶴子
高等師範學校助教諭 樋口勘次郎
帝國大學教授 元良勇次郎
東京府有馬小學校長 森田勝
東京府尋常師範學校教諭 角谷源之助
臺灣國語學校教諭 鈴木光愛

發行所 東京市本郷區元町一丁目三番地 東洋社

女鑑第百三十四號目錄

社告

〇代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事〇郵便爲替は東京**銀座**郵便取扱所へ御振込可被下事〇郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割増の事〇別に領收證を出さす金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若強ひて領收證を要せらるゝ者は別に證書郵送料送附の事〇未税納の來書は一切受取不申候事

女鑑
每月五日廿日發行

定價	一冊	十錢
	六冊前金(三ヶ月分)	五十五錢
	十二冊前金(半年分)	壹圓
	全國無遞送料	
廣告料	五號活字廿三字詰一行金二十錢	

明治三十年六月十九日印刷
同　年六月二十日發行

編輯兼發行人　東京京橋區築地二丁目二十一番地　川崎直衛
印刷人　東京京橋區南八丁堀一丁目十一番地　並木良雄
發行所(電話番號本局八八)　東京京橋區築地二丁目二十一番地　國光社
(印刷所　東京國光社印刷所)

〔明治二十四年八月四日內務省許可〕
〔明治二十五年三月十[illegible]日遞信省認可〕